

山前遺跡



昭和 51 年 3 月

宮城県小牛田町教育委員会

山前遺跡

題字は 小牛田町長 萩村和夫による

7000年前のむかしから……



小牛田町長 栗 村 和 夫

少くとも、7000年前のむかしからここに断続的に人間が住んでいた…ということを、この発掘調査は教えてくれた。

しかし発掘調査のためには、大変な金と労力と時間とを要した。私も町長として、これらのことの前に戸惑ったし、悩みもしたが、そのことを卒直に語らなければ、この序文はお飾りの序文になってしまう。

私はこの地帯を良質の宅地造成を軸として、国や県の出先機関の敷地の予定地に考え、開発公社に土地の取得を依頼した。のままでは、民間の手での開発がなされ、完全にスプロール化してしまうと考えたからであり、山前遺跡の場所でもあり、団地内公園にその由来をとどめておきたいとも願ったからである。ところが公社による土地取得のメドがついたとき、開発まかりならんと、県文化財保護課より“待った！”がかかった。私は正直なところ、町史にも山前遺跡のことは収録がしてあるので、改めて発掘をする必要がなかろうと考えていた。また、待ったがかったことによって、借入金の利子がかさむことや、建設単価の値上がりのこともおそれた。ハムレットの悩みとは正にこのときの気持である。

だが私は、文化財保護法があるなしにかかわらず、その時期の町長として、町民に対してこの大切な先祖の遺産を残す“義務と責任”があると考えた。こうして県文化財保護課と文化庁の要請に全面的に応ずることにしたのである。昭和49年夏の第一次緊急発掘には、予備費をはたいてしまったので、役場職員を発掘人夫として、延べ137名も炎天下に動員をした。そして昭和50年4月に始まった第二次調査には、予定したとおりの補助対象事業には認められず1,220万円の巨費を投じ、その上12,000m²の大きな面積を国指定の史跡として残すことにして、ビリオドを打ったのである。春秋の筆法をもってすれば、町にこの場所の開発計画がなければ、民有地のままの遺跡は破かいをされてしまったのである。

県関係者は、町長の勇気ある決断といってくれたが、私としては町の後輩のために勇断を下さざるを得なかったということである。そして、これから文化財保護行政が国家予算の面で前進することを卒直に願って、序文の結びとする。

序

わが町の遺跡群については、町史で明らかにされているように、当該山前遺跡を始め、沢山の遺跡の分布をみることができます。

昭和40年に町史編さん上の資料として、山前遺跡の一部を発掘調査しましたが、この地帯に広範囲にわたって埋蔵されている遺物を、確認することはできませんでした。今回この地域を町で買収して、分譲宅地として造成する事業を起すことになり、急きよ発掘調査に迫られたので、宮城県教育厅文化財保護課の技術職員の全面的援助をうけて、記録保存調査と、現状保存区域認定のための範囲確認調査という2つの目的をもって調査にとりかゝりました。

発掘調査は昭和50年4月9日に始まり、11月9日までの7ヶ月を要し、約28,000m²の調査がおこなわれました。この結果縄文時代早期の新山前貝塚の貝塚の範囲、同早期、前期、中期の遺物包含層、古墳時代初頭の大溝、古墳時代、奈良平安時代の住居跡群、中世の板碑群などの存在が確認されました。これら各時代の遺構、遺物の集中する範囲の中央部約12,000m²については、現状保存区域に指定し、町の史跡公園として整備をして、長く保存することにしました。

こゝに調査の結果がまとまりましたので、報告書を作成し、郷土の文化財資料として、町民各位からご理解と、広くご活用をいただきたいと思いますし、学術上の資料として町外の方々からもご高覧を賜れば幸甚です。

この調査に際しては、県文化財保護課千葉与一郎課長をはじめ、課員各位のご協力をいただき、報告書刊行に至るまでにご尽力を賜りましたことに対し、深甚なる感謝を申しあげます。

昭和 51 年 3 月

宮城県小牛田町教育委員会

教育長 佐々木 京一

目 次

I.	調査にいたる経過	1
II.	遺跡の位置と環境	2
1.	位置と自然環境	2
2.	歴史的環境	4
III.	調査の方法と経過	9
IV.	調査概要	12
縄文時代　早期	13	
前期	19	
中期	19	
古墳時代　前期	29	
後期	44	
奈良・平安時代	47	
中世	51	
V.	まとめ	57

例 言

1. 本書は小牛田町団地造成計画に伴う第二次発掘調査概報である。
2. 遺跡所在地 宮城県遠田郡小牛田町北浦字山前、新山前
3. 調査主体者 小牛田町
4. 調査担当者 宮城県教育文化財保護課
5. 調査期日 昭和50年4月9日～11月9日
6. 遺跡面積 約40,000m² 調査対象面積 約28,000m² 発掘面積約9,000m²
7. 調査協力機関 東北歴史資料館 宮城県多賀城跡調査研究所
8. 遺跡記号 DS
9. 調査協力者
調査補助員一宮城教育大学学生 鈴木まち子、齊藤輝子、鈴木寿美子、佐藤幹恵、戸島三雄、扇山田美子、山根京子
- 調査協力員一宮城県第一高等学校教諭 伊藤信、小竹小学校教諭 加藤貞子、中津山第二小学校教諭 土岐山武、前谷地小学校教諭 森貢吾
- 地元協力者一佐藤栄一、境昭藏、遠藤操、前畠亨、今野義見、小野寺昇、五十嵐洋一、阿部毅、松田与三郎、富田敏夫、伊藤仁輔、佐々木良郎、小野毅、畠中好吉、大室孝平、門間三郎、石堂征也、佐々木正喜、境貞吾、後藤良一、小野寺兼雄、伊藤栄、齊藤徳男、渡辺美寿恵、山崎光子、佐々木智子、伊藤和正、今野茂、今野金作、堀潤正一、阿部三治、佐藤やす子
10. 本書の執筆・編集は、宮城県教育文化財保護課が行なった。

I. 調査に至る経過

1.これまでの調査

山前遺跡は古くより石器の出土する土地として知られていたが、昭和40年、町史編纂のための基礎資料を得るべく、辺見駒高氏（小牛田農林高校教諭）によって学術調査が行なわれた。その結果、縄文時代早期末の貝塚と縄文中期の遺跡であることが明らかになり、研究結果の一部は町史に掲載され、広く知られていた。

小牛田町は交通の便がよく仙台市内への通勤範囲内にあり、大崎地方の中央部に位置しているため住宅の需要が特に多く、町は住宅行政を積極的に進めていた。町としては町史編纂の際に多額の経費を投入して当遺跡の学術調査を実施したので住宅団地を造成しても支障ないものと理解していた。この団地造成計画があることを昭和49年6月に知り、同月10日と28日の2回にわたり計画地内の現地調査を実施した。調査の結果、水田面に臨む丘陵地全面にわたり、縄文土器、土師器、須恵器片等の遺物の散布が認められ、造成計画地のほぼ半分が遺跡であり、昭和40年の町史編纂のための調査は、この遺跡のはんの一部分であることが判明した。

この団地造成は大崎東部開発公社が用地を取得し、町が造成して分譲するもので、この時はすでに開発公社が用地を買収し、県農業文化センター及び海上保安庁のデッカ基地が建設されることになっており、遺跡を現状のまま保存することは不可能であった。このような状況の中で町当局と遺跡の保護について協議を重ねた。町としても町発展の構想のもとに住宅行政をすすめしており文化財を保護する立場もあるため、その解決の方向を見出すまで紆余曲折の過程をふみ、この間、数回にわたり文化庁の指導も受けた。このような経過のもと、49年度と50年度の2回にわたり町の事業として記録保存のための調査を実施し、重要な部分については国庫補助事業によって造構確認調査を実施してその保存対策を講じることにした。

2.記録保存及び造構確認のための調査

昭和49年の夏休みを利用して国及び県の機関が予定されている場所について小牛田農林高校辺見教諭に調査を依頼して実施した。遺跡の東端にあたる場所であったが、古墳時代及び奈良平安時代の集落跡を検出し、多数の遺物を発掘した。この調査は急に計画されたために作業員の集まりも悪く、町長を先頭に町職員も発掘に参加し、文化財の認識を新たにするとともに作業能率も大いに上げることができた。このようにして第1次調査を完了した。

昭和50年度、第2次調査は文化財保護課が調査を担当して、記録保存のための調査と造構確認調査を4月9日より開始し、11月9日に完了することができた。その結果、極めて重要な造構を多数検出し町長はじめ、町当局の御理解のもとに約12,000m²を保存することができた。

II. 遺跡の位置と環境

1. 位置と自然環境

山前遺跡は、遠田郡小牛田町北浦字山前・新山前に所在している。東北本線小牛田駅の西方約2kmの地点にあたる。

宮城県の北部には、古川市を中心として、いわゆる大崎平野が広がっている。この平野は江合川、鳴瀬川などの河川によって形成された沖積地で、現在水田として利用されており、県内有数の穀倉地帯となっている。

小牛田町は、この大崎平野の東部にあり、町の北を江合川、南を鳴瀬川がそれぞれ東流している。町内のはほとんどが沖積地であるが、町の中心部には河川などによって削り取られて孤立化した東西に長い小起伏丘陵がよこたわっている。この丘陵の南側には、鳴瀬川によって形成された河岸段丘がみられる。

山前遺跡はこの段丘上に立地している。遺跡の北に接する七館八沢付近は杉林、南は水田面をのぞむ。遺跡の中央部は水田面に張り出したゆるやかな舌状の斜面であり、西および東は、



写真1 遺跡遠景（航空写真）



舌状部のつけ根から細長くのびた急斜面である。遺跡全体の面積は約40,000m²におよぶ。

現状は畠地で、造跡中央部での標高が約20m、南の水田面との差高が約10mである。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

小牛田町には、数多くの遺跡が分布している。それらのいくつかを、山前遺跡付近を中心として述べてみる。

町内では、今まで旧石器時代にさかのぼる遺跡は発見されていない。

次の縄文時代は約1万年前に始まる。狩猟、漁撈、採集が生活の基盤になっている。この時代にはいくつかの遺跡がみられる。最も古いのは、早期末葉の遺物を出土する素山貝塚、新山前貝塚などである。この2つの貝塚は、鹹水産の貝で構成されており、のことから当時海岸線が近くまで来ていたと考えられる。

前期・中期の遺跡としては彫堂遺跡があり、多数の土器・石器などと共に炉跡が検出されている。さらに後期・晩期では船入遺跡、牛飼遺跡、峯山遺跡などがある。



第2図 遺跡付近の地形

縄文時代が終末をむかえ、紀元前後になると、金属器をもち水稻栽培の行なわれる弥生文化が伝わり、この地方でもしだいに弥生時代へと変わっていく。新山前貝塚付近、彌堂遺跡からこの時代の遺物が発見されている。

3～4世紀ごろには古墳時代になる。この時代は、階級分化が成立し、支配者階級の葬制としての高冢古墳が出現する。町内では京銭冢、保土塚、糠塚などの古墳と、駒米遺跡などの集落遺跡がみられる。

奈良・平安時代の遺跡としては駒米遺跡、狐山遺跡などが知られている。

中世になると、いわゆる七館八沢などの館跡や、板碑などが発見されているが、一般住民の生活を示すような遺跡は知られていない。



写真2 保土塚古墳

小牛田町遺跡地名表

市町村番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品の在地	文獻・その他の資料
39001	125(00)園	小4・田山前・通路	北端・専金山前 河岸段丘(鶴岡川)	凹合地	縄文後 平安	烟 櫻文岡	櫻文土器 十字彫器	小牛田農耕学校 伊勢信雄「宮城県遠田郡不動堂村舊羽出科御食面標 古2 骨標」東北大学文書室典藏部蔵
39002	新山前貝塚	"	"・新山前	"	貝塚	櫻文岡	"	"
39003	"	池堂七船跡	"・山前	小起伏地	古	山地	"	長崎・船塚・櫻文地・火之介船・櫻船・小船 大船の總称「小牛田町史」
39004	"	一本松古墳	"・ "	河岸段丘	古	墳	烟	"
39005	"	八雲占塚	"・侍	丘	縄文後 古	墳	半輪林 3基	"
39006	"	西頭山(鶴頭山)	西	輪	段丘	動	中世 近世	「風土記」「伊達文書」
39007	"	磨堂遺跡	清水谷地・17601	丘	鹿	包含地	鶴文後 平安	小牛田町史・上 原影をとどめず
39008	"	一石塚古墳	北前・急坂機 神保地	円	墳	奈良	土師桶片・須恵器等	"
39009	"	丁名塚	"	・丁名塚	丘	變	田	小牛田町史・上 原影をとどめず
39010	"	舟入通跡	"・舟 入	凹合地	櫻文後 古	山林	櫻文土器片	"
39011	"	素山貝塚	素山・桜木前	"	貝塚	櫻文岡	淨水器 敷地	東北大学 附属高麗 小牛田町史
39012	"	柳家古墳	素山	丘	鶴先端 円墳	古墳後 方	宅地 煙	伊勢信雄「宮城県遠田郡不動堂村舊羽出科御食面標 古2 骨標」東北大学文書室典藏部蔵 「小牛田町史」
39013	"	京鐵塚	"	素山	丘	後 方	古墳中寺院	"
39014	"	墨山遺跡	素山	山野斜面	包含地	櫻文	烟	昭和11年鶴田、原形をとどめず 小牛田町史

39015	小牛田	牛 利 遊	牛 制 滅	牛 制 滅	丘 隆	包 含 地	繩 文 後	校 庭	繩 文十國岩+
39016	"	越谷森松穴古墳	北浦・越谷森	"	橋 木 墓	古 墓			小牛田農林高校 原形をとどめず
39017	"	棚 家 游 游	茶 山	棚堂丘陵上	包含地	奈 良	土 制 器・須恵器片		原形をとどめず
39018	"	保 上 家 古 墳	素 山・板木町	丘 陵 内 墓	古 墓	吉 墓			
39019	"	後藤神社古墳	"	"	"	"			"小牛田町史・上"
39020	"	蜂 谷 森 "	北浦・蜂谷森	"	"	古 墓	光 楽 地		"小牛田町史・上"
39021	"	志 賀 須 志 賀 須	白 地	輪 織			瓦 砖	校 庭	現在不動掌付学校用地
39022	"	念仏山古墳	北浦・山前	沖 横 地	円 墳 ?	古墳中湖	山 林		"小牛田町史・上"
39023	"	下 墓 "	牛 制・新内原 丘	變	円 墳 ?	古 墓	共 同 墓 地		"小牛田町史・上"
39024	"	飯 善 尾 "	寺 /	越	"	田 墓	山 墓 地		"小牛田町史・上"
39025	"	東 谷 地 "	北浦・東谷地	丘陵光陽	"	"	光 樂 地		"小牛田町史・上"
39026	"	坪 田 游 路	"・坪 田	丘 隆	包 含 地	奈 良	鐵 器 片 須恵器片	小 牛 田 駅	原形をとどめず
39027	"	貝 乘 古 墳	候 木 町	丘 隆	古 墓	奈 良	土 制 器 (赤・鉢)		"小牛田町史・上"
39028	"	鶴 之 山 "	西	施 丘	古 墓	古 墓	公 園		"小牛田町史・上"
39029	"	駒 米 游 游	北浦・駒米	丘 隆	集 俗 地	奈 良	土 制 器・須恵器片 石 制 塔 道 品	小 牛 田 宅 地	"小牛田町史・上" 現在は宅地
39030	"	山 内 游 游	牛 制・御 藤 游	"	包 含 地	奈 良	土 制 器・須恵器・刀 烟	面 目	古 墓 と 宅 地 あり "小牛田町史・上"

39031	小牛田	化粧板彫刻	化粧柱	板	丘	旋	包含地	平	基	水	日	須彌器・布目瓦	小牛田町	「小牛田町史・上」
39032	"	狐山彫	小洞	洞	自然堤防	堤物路	齊	基	水	田	日	土器器・乳頭器片・ 布目瓦片・乳頭器片・ 鐵石	"	「開放」東北学院大学「文学研究部」(S.44. 10)「小牛田町史・上」
39033	"	小泡彫	小	洞	自然堤防	(鷹巣川)	堤物路	齊	基	水	日	土器器・乳頭器片・ 青・白磁片	"	「小牛田町史・上」
39034	"	吹善寺	堀	堀	/	掘	地	地	基	水	日	土器器・乳頭器片	"	
39035	"	十二神造彫	中堆・十二神	冲積地	凹食地	基	以	安	烟	土器器・須彌器片	小牛田町	「小牛田町史・上」		
39036	"	谷彌院	"	放堆・山土	"	包含地	"	"	"	"	"	"	"	「小牛田町史・上」
39037	"	中田	"	中堆・中田	"	"	游	平	以	"	"	"	"	「小牛田町史・上」
39038	"	坪畠古墳	北湖・塙	丘	陵	田	墳	古墳	"	"	"	"	"	「小牛田町史・上」

III. 調査の方法と経過

発掘開始前に分布調査を行った結果、遺物の散布状況・地形などにより、遺跡の面積は約40,000m²に及び、既知の新山前貝塚は山前遺跡の一部に含まれると考えられた。

調査の対象範囲は遺跡全体のうち、団地造成が計画された約28,000m²であり、遺跡のかなりの部分が含まれている。

発掘調査は昭和50年4月9日に始まった。まず調査範囲内に、中心部を通る東一西、南一北の直交する基準線を設定し、それぞれNOS、EOWとした。次にこれをもとにして全体に3m方眼のグリッドを設定し、4グリッドをつなげた3×12mのトレンチによって発掘を開始した。調査の当初の目的として次の2つがあった。

①貝塚と、その他に調査によって重要な遺構が発見された部分は現状のままの保存を考えるという前提があり、その範囲を認定すること。

②前述の保存区域以外の部分については、団地造成の事前調査として記録保存調査を行なうこと。

このため、まず全体に表上を掘り下げて、その下にどのような埋蔵文化財がどのように分布するかを確認することに主眼を置いて調査を進めた。

その結果、縄文時代早期の貝塚の範囲、早期・中期の遺物包含層、竪穴住居跡、古墳時代の大溝、竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、中世の板碑などの存在と一応の範囲が確認された。

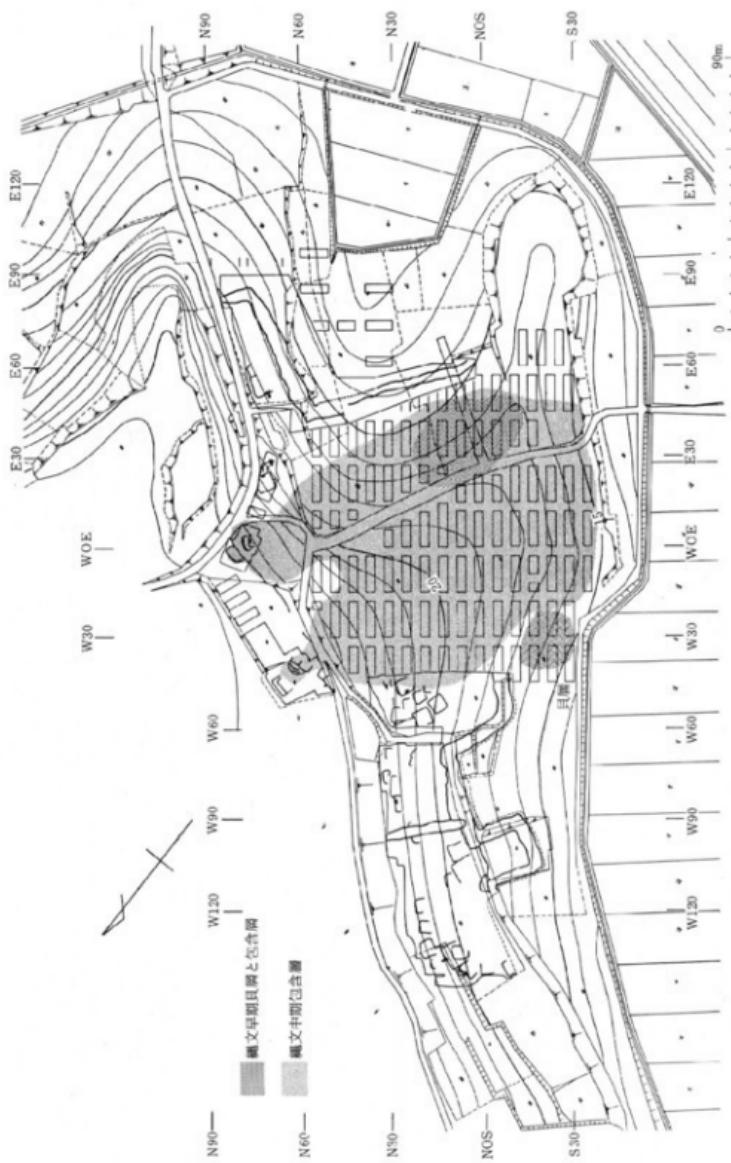
この時点で、縄文時代の遺構を中心とし、さらに各時代の遺構・遺物の集中する範囲約12,000m²を現状保存区域として設定した。なお、保存区域のうち東斜面の大溝と遺物包含層の一部は内容確認のための精査を実施している。

一方、保存区域を除いた約16,000m²については記録保存調査を開始した。このうち水田部は数本トレンチ掘りをしたところ、地表より深さ約2mまでは各時代の遺物がごく少量混在して出土した。さらにその下1mには古墳時代と思われる土師器を出土する層がみられた。しかし3mを越す深さと湧水のため作業に危険をともなうことが予想されたので発掘調査は断念し、花粉分析による環境の復原のための調査のみを行なうこととした。水田部以外については全面掘りを行なった。その対象になった部分は大きく5区に分かれている。東部がB区、北部の団地用道路敷がG・H区、西側がD・E区である。

発掘調査が進み、遺構の精査がほぼ終了し、調査内容のほぼ全部が明らかになった9月13日に、調査の経過と成果を一般に公開するため、発掘現場において説明会を開催した。

その後、記録作成にうつり、まず各遺構の断面図・平面図を作製した。平面図については、

第3図 滑走路成図



住居跡などは遺り方で、大溝だけは平板で測量を行なった。さらに写真撮影などをし、11月9日に発掘調査を終了した。

最終的に発見された遺構・遺物は次のとおりである。

- ①绳文時代 遺構—早期の貝塚、早期・中期の遺物包含層、中期の住居跡3軒など
 遺物—早期・前期・中期の土製品（土器など）、石製品（石器・石棒など）

- ②古墳時代～奈良・平安時代

 遺構—古墳時代前期の大構、古墳時代前期・後期～奈良・平安時代の竪穴住居跡49軒など

 遺物—土師器、須恵器、木製品、竹製品など

- ③中世 遺物—板碑、陶器など



写真3　遺跡近景（航空写真）

IV. 調査概要

縄文時代

旧石器時代に後続する時代で、今から10,000年～2,000年程前までの時代である。縄文時代には土器が作られるようになり、旧石器時代以来の打製石器だけでなく、磨製石斧などの磨製石器も作られるようになった。土器の表面には、縄を回転して施した縄目文様を持つ土器が多く、縄文時代という名もここからきている。

縄文時代人は、石器や骨角器などの道具を使って、イノシシ・シカ等の獣や鳥・魚貝類を捕獲し、まわりの山々から種々の植物を探集して食べるという生活をしていた。

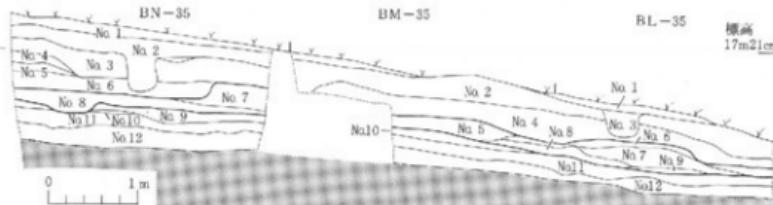
小牛田町内には、縄文時代の遺跡が多く、山前遺跡もその1つである。今回の調査の結果、次のことが明らかになった。

早期には、舌状に南に張り出す台地の西斜面に貝塚を形成し、反対側の東斜面には遺物包含層を形成している。また、調査区西端からは前期の遺物を包含する層が検出されている。中期になると、遺物包含層が広い範囲にわたって形成され、調査区の北側からは、3軒の竪穴住居跡も検出されている。

遺物包含層

保存区域内の遺跡の内容を明らかにするために、舌状台地東斜面の遺物包含層(BL～BN-35区)の精査を行なった。各層とも東にやや傾斜して堆積しており、4層に大別される。

第1層：暗褐色の耕作土である。(BL～BN-35区No.1層)



分野	地質	層	厚さ	層名	層の特徴
地 1 地 1	粘土質砂岩	No.1	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 2 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	-	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.2	0.17m	Cultivated Soil & Medium Soil	耕作土
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.3	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.4	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.5	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.6	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.7	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.8	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.9	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.10	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.11	0.17m	Wetland Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.12	0.17m	Wetland Soil	

分野	地質	層	厚さ	層名	層の特徴
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.1	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.2	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.3	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.4	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.5	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.6	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.7	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.8	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.9	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.10	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.11	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	
地 1 地 2 地 3 地 4 地 5 地 6 地 7 地 8 地 9 地 10 地 11 地 12	粘土質砂岩	No.12	0.17m	Wetland Soil & Shallow Fresh Soil	

第4図 遺物包含層断面図 (BL～BN-35区)

第2層：炭化物、焼土を微量に含む黒褐色の層で、土色・土性の若干の違いによってさらに細分され、BL-35区No.6層は住居跡の堆積土と思われる。出土土器の大半は中期後半のもので、前期の土器片が若干混入している。(BL-35区No.2～No.6層、BM-BN-35区No.2～No.4層)

第3層：黒褐色のシルト層で、土色、土性の若干の違いによってさらに細分される。(BL-35区No.7～No.8層、BM-BN-35区No.5～No.9層)

第4層：黒褐色の中砂層である。(BL-35区No.9～No.12層、BM-BN-35区No.10～No.12層、BM-BN-35区No.11、12層)

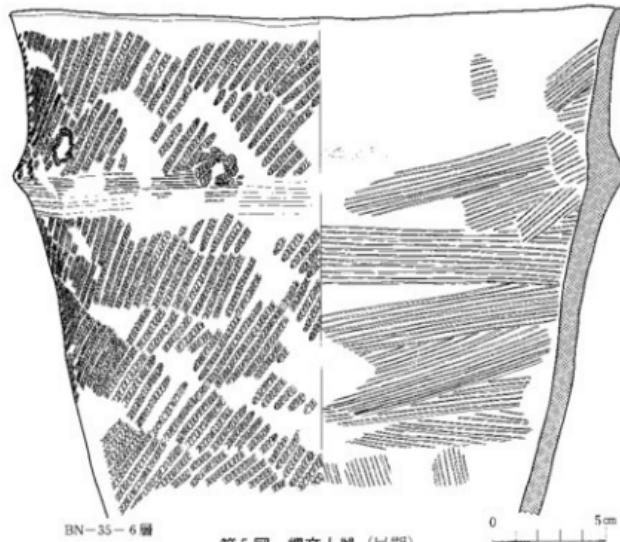
第3、4層から出土する土器は、いずれも早期後半のものであるが、層によって違いが認められる。

今回の調査の結果明らかになったことを、早・前・中期と時期を追って記述する。

一早 期

早期末(約7000年)に、舌状に南に張り出す台地の西側斜面に、約25×20mの範囲で、カキ、ハマグリ等の敵水産の貝類によって構成される貝層が形成された。この台地の反対の東斜面にも、ほぼ同時期の遺物包含層が形成されている。貝層と遺物包含層の間にある台地の平坦面には、竪穴住居跡などの存在が予想される。

貝層は、当時の人々が付近の海で採集し、食べて捨てた貝殻が、長い間に層をなして堆積し



第5図 繩文土器（早期）

たものである。当時の海岸線が、現在よりもかなり内陸部にはいっていたと考えられる。また、貝層中からは、当時の人々が食べた、イノシシ、シカ等の動物の骨や、鳥類・魚類などの骨のように、普通の遺物包含層では残りにくい自然遺物が残っており、当時の狩猟技術や、食生活を考える上で貴重な資料となっている。

遺物包含層 (BL-BN-35区) 第4層出土の土器 (第6図)

【器形】小破片の為、全体の器形は不明である。【口縁部】平縁と思われ、口唇部上面に貝殻の腹縁か、砲による刻目のあるものがある。(第6図-2.4.7)【底部】底部破片がなく不明。
【胎土・焼成】わずかに植物の纖維を含むものがあるが(第6図-1)、大部分は纖維を含まず、焼成は良好である。

【器厚】4~6mm内外のもので一般に薄手である。

【文様】サルボウまたはアカガイ等の貝殻の腹縁を刺突した、貝殻腹縁文である。口縁に対して、縦位に連続して刺突し、数段帶状に施文している。裏面に擦痕の観察されるものもある。(第6図-6) サルボウ・アカガイ以外の施文具による刺突文もある。(第6図-8.10.11)

【時期】これらの土器は、貝殻腹縁文が特徴的にみられることから、早期後半の大寺式に属するものと思われる。

遺物包含層 (BL-BN-35区) 第3層出土の土器 (第5~8図)

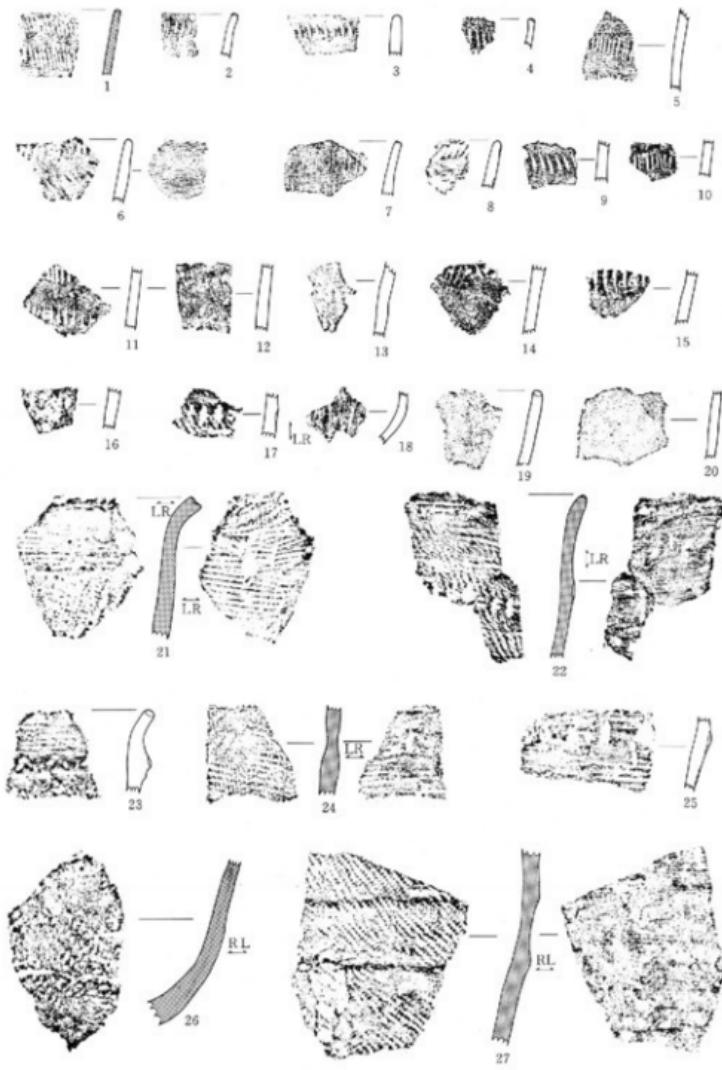
【器形】口縁部が直立するもの、口縁端近くで強く外反するもの、ゆるやかに外反し頸部がややしまって胸部がやや張る深鉢形のものがある。【口縁部】平縁のものが多いが、なかには突起を有するものもある。(第7図-13) 口唇部上面には、撫糸圧痕のあるもの(第6図-21 第7図-2.7.11. 第8図-3-5.13. 16.) 指頭状圧痕のみられるものもある。(第6図-23)

【底部】砲弾状の底部のものが多いが(第6図-26)、平底と思われる破片もある。(第8図-2)
【胎土・焼成】植物の纖維を多量に含んでおり、吸水性が強く、もろいものが多い。

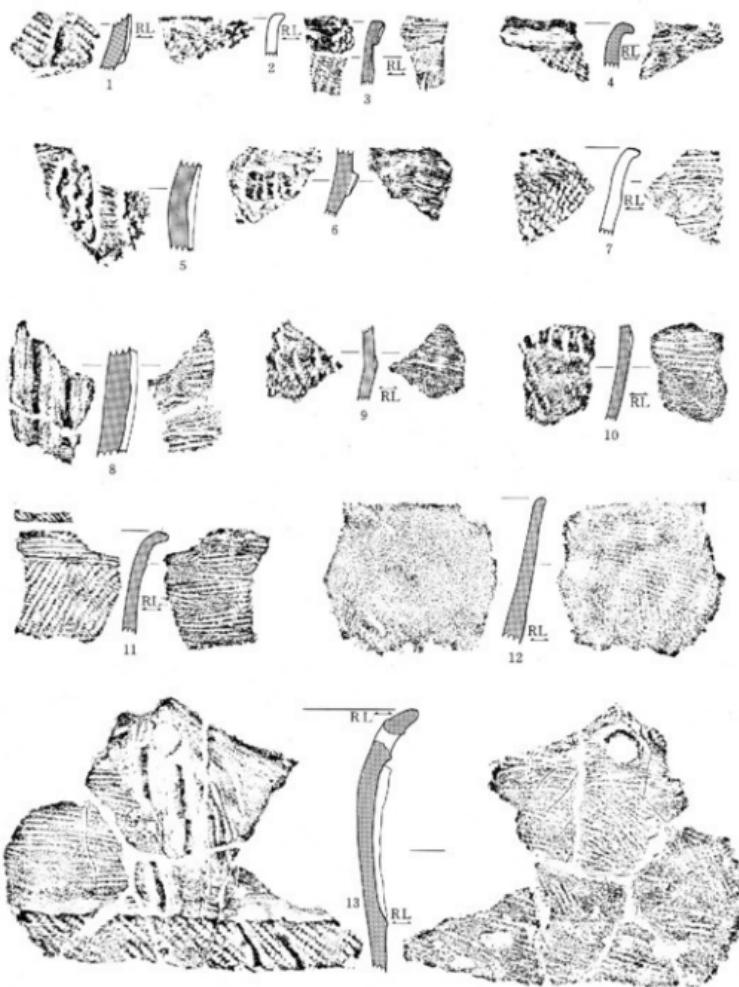
【器厚】6~9mmのものが多い。

【文様】表面には繩文だけのものと、繩文と、条痕文(アカガイ・サルボウ等の貝殻の腹縁で引かれた文様)を施すものとがあり、裏面は条痕文のものが大部分である。表面の繩文は、単節斜行繩文で L R. R L の両方があり、横位施文のものが多い。裏面の一部にまで施文されているものもある。(第6図-21、第7図-13、第8図-11、12) また頸部と胸部を画すよう

に肥厚させて隆帯を形成し、隆帯上には貝殻腹縁による刺突文や(第26図-22、第7図-6.9. 10. 図版8-16) 繩文原体を縦位に押圧したもの(第6図-23、25) 繩文原体を輪のように折りまげて一定の間隔に押圧したものがある。(第5図) 口縁部から2木の隆帯を頸部まで垂下したものもある。(第7図-8、13)



第6図 縄文土器（早期）

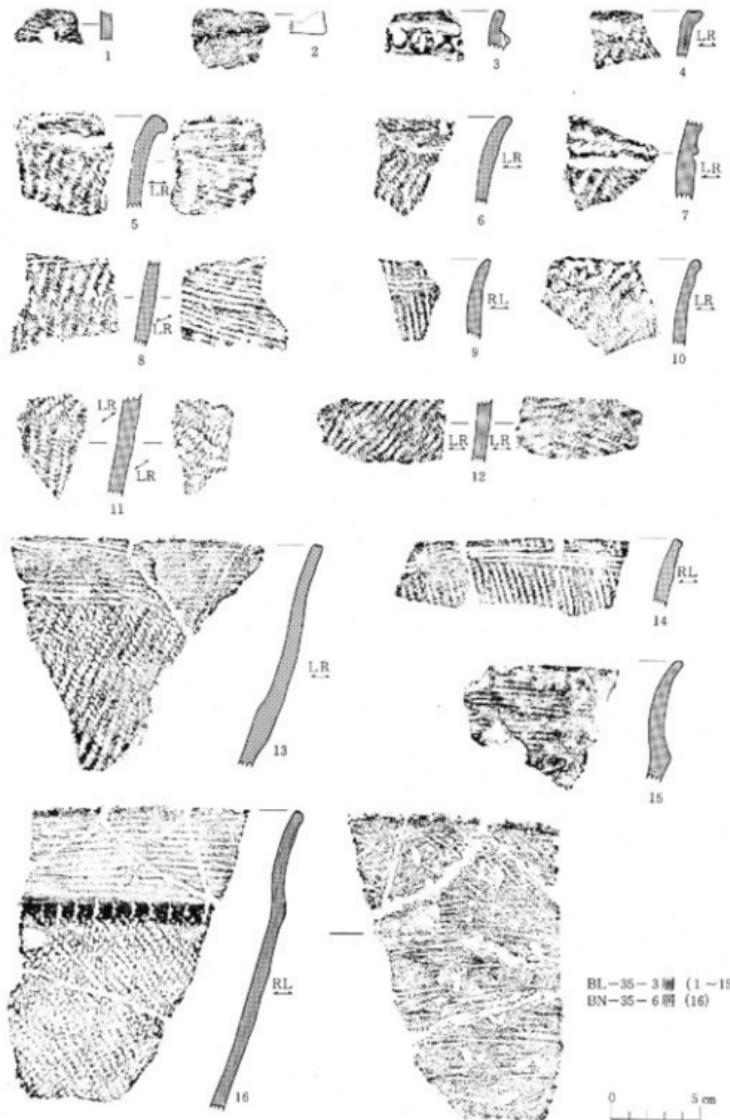


BL-35-3期 (1~13)

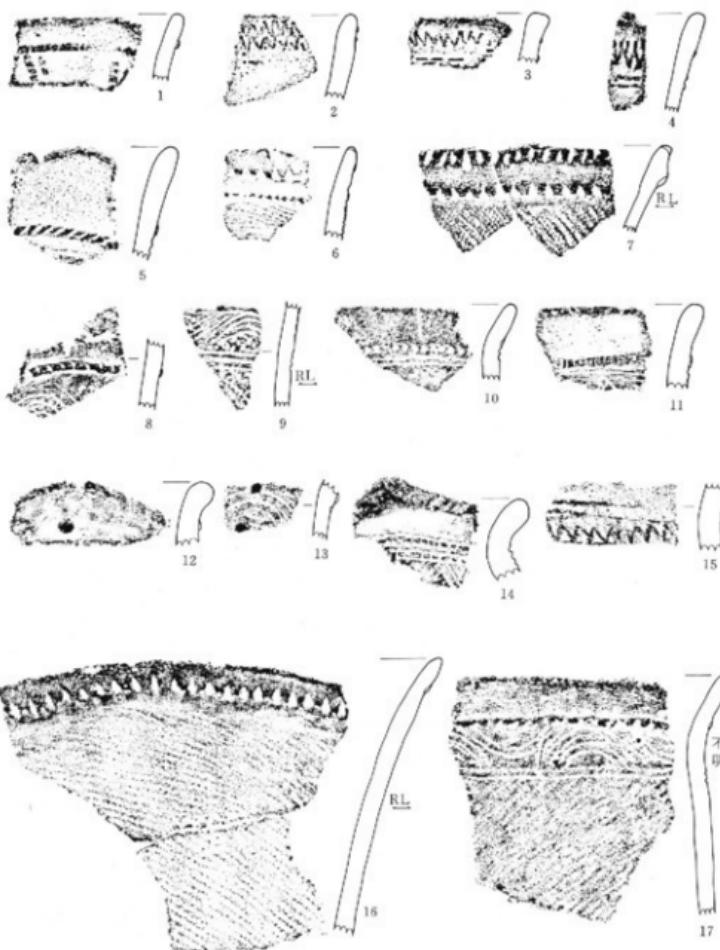
断面にスクリントーンを貼ってあるものは、繊維を含んでいる。
→は繊文原体の回転方向を示す。



第7図 繊文土器 (早期)



第8図 繩文土器（早期）



ED-36-2 瓢 (6、12、16)
 EM-N32-34
 - 2~3層 (2、5、8、10、11)
 EQ-36-2 瓢 (1、3、4、7、9、14、15、17)
 EQ-35-2 瓢 (13)

0 10cm

第9図 縄文土器（前期）

〔時期〕表面に繩文、表面に条痕文を施文した土器群であり、早期末の素面2式に属する。

一前一期

前期前半の土器片が、BL～BN-35区の中期の包含層中から若干出土している。また前期後半の遺物を包含する層が、調査区の西端から検出されている。

遺物包含層 (BL～BN-35区) 第2層出土の土器 (第16図、第17図)

〔器形〕小破片の為、全体の器形は不明である。〔口縁部〕平縁のものが多いが、小突起を有するものもある。(第17図-6)〔底部〕半底である。

〔胎土・焼成〕植物性纖維をわずかに含んでいる。

〔文様〕地文には不整燃糸文がある。(第16図-11、第17図-2～5.7) 文様には、爪形文(第16図-13、第17図-6)先端部が角ばった刺突具による列点刺突文(第16図-12、第17図-1.2.4.5)、竹管文(第17図-7)がある。

〔時期〕大木3式に属すると思われる。

E区を中心に出土の土器 (第9図)

〔器形〕ほぼ直立した円筒形の深鉢形土器である。〔口縁部〕平縁のものと(第9図-7.16.17)、波状口縁のものとがある。(第9図-5.12.14)〔底部〕半底である。

〔文様〕口縁部下端に刻目を入れて鉗巻状にしたもの(第9図-6.7.16)、3～4mmの幅の細い粘土紐を山形に貼付したもの(第9図-2～4.15)、ボタン状に粘土を貼付したもの(第9図-12.13)、半截竹管による交互波状文のものがある。(第9図-8.9.17)

〔時期〕大木5式に属すると考えられる。

一中期

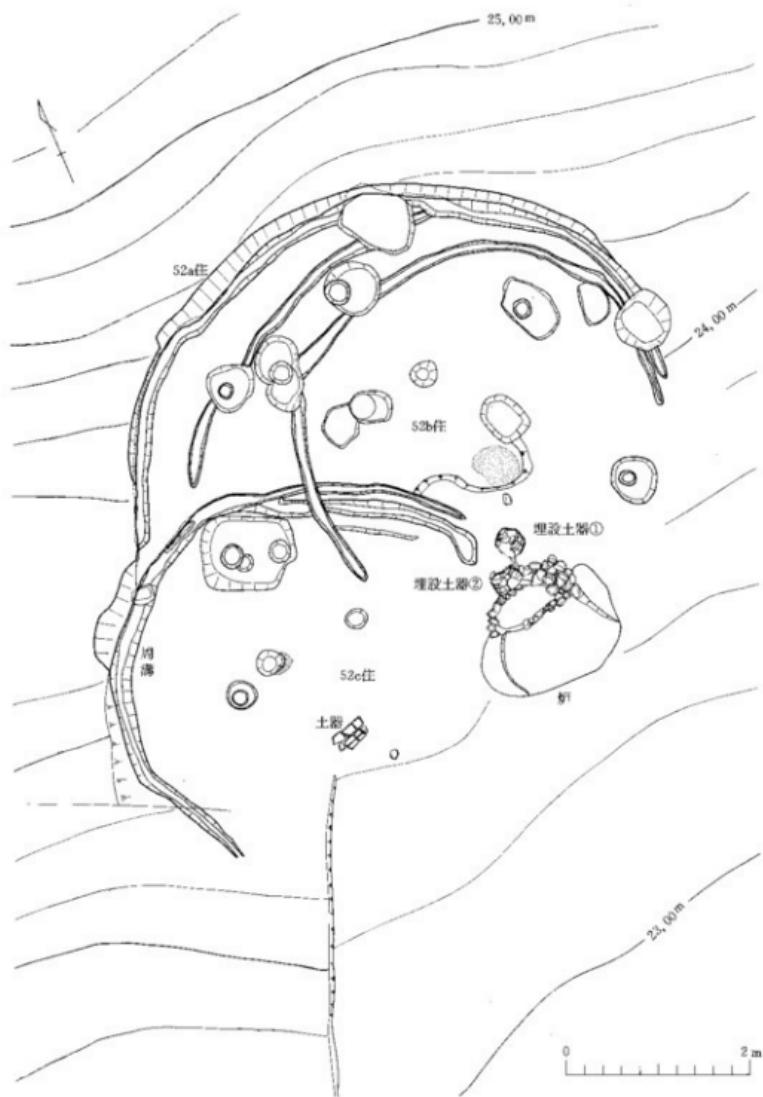
早期、前期の遺物包含層の範囲は、遺跡全体の中のごく狭い面積であるが、中期後半になると広い範囲にわたって遺物包含層が確認されている。また、調査区の北側からは中期後半の竪穴住居跡が3軒検出されている。

第52a、b、c住居跡 (第10図)

(重複・増改築) 52a、52b、52cの3軒の住居跡が重複している。52c住居跡は、52b住居跡より古く、他の新旧関係は不明である。

(平面形) 南半は壁、および周溝を確認することが出来なかったが、平面形はほぼ円形と考えられる。

(壁の状況) 南に傾斜する斜面に構築されているために、北壁は高いところで86cmある。北壁は部分的に外側にえぐり込まれている。



第10図 第52a, b, c住居跡

(床面) 床面はほぼ平坦であり、40×40cmの範囲で焼けている部分が検出されている。

(柱穴) 52a、52b、52cの床面上から、16個のピットが検出されているが、どのピットがどの住居跡の柱穴であるか検討中である。

(周溝) 52a、52b、52c住居跡の周溝が5本検出されている。各住居跡の増改築を考えられる。

(炉) 長軸約1.1m×短軸約0.6mの長楕円形を呈し、側壁に石を敷いた石組炉である。炉に接

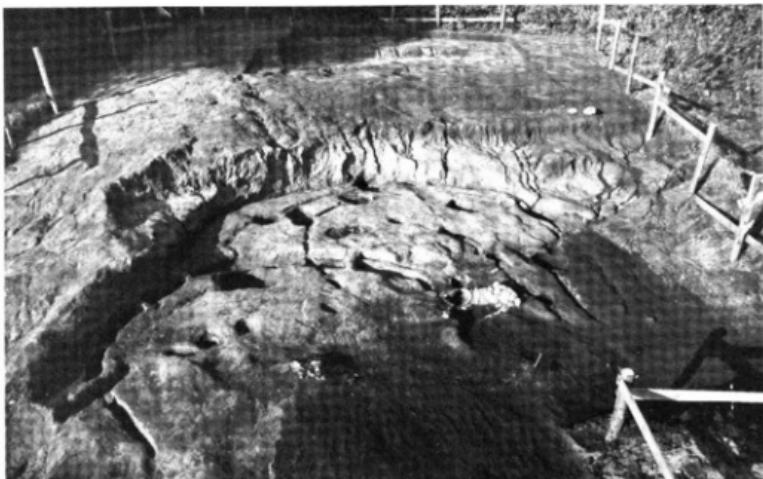


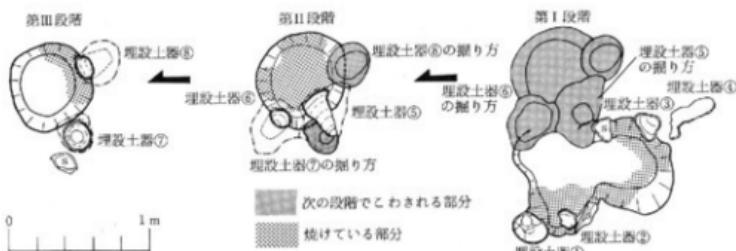
写真4 第52a, b, c住居跡



写真5 同上炉



第11図 第55住居跡



第12図 第55住居跡炉の変遷

して2個の埋設土器が検出された。埋設土器①、②は、ともに斜めに埋設されている。

(年代決定資料と年代) 床面上から出土した完形の土器1点、炉の埋設土器①、②住居跡内の別の埋設土器1点が年代決定資料である。本住居跡の構築年代は、中期大木9式期と考えられる。

第55住居跡（第11図）

(重複、増改築) 第28住居跡と重複しており、これより古い。周溝、柱穴、および炉から最低2回の増改築が行なわれたと思われる。

(平面形) 全体の平面形を明らかにすことができなかつたがほぼ円形と思われる。

(壁の状況) 全体的に保存が良好でないが、北側で高さ10~20cm残存している。

(床面) 床面はほぼ平坦であり、北半は地山、南半は包含層を床面としている。床面上には、3ヶ所焼けている部分が検出されている。

(柱穴) 床面上からは、約40個のピットが検出された。壁に沿って内側に傾斜をもつピットも検出されている。どのピットが柱穴であるか検討中である。

(周溝) 幅約10cm内外、深さも10cm内外の周溝が確認されている。

(炉) 炉は最低2回改築が行なわれている。(第12図)

第Ⅰ段階一円を2つ組み合わせた平面形を呈し、埋設土器①は、縦に埋設されているが、他の埋設土器②~④は斜めに埋設されている。

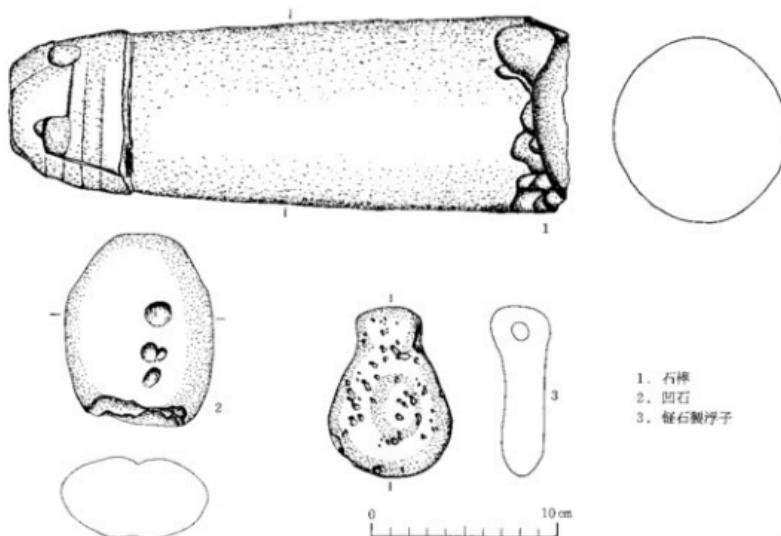
第Ⅱ段階一第Ⅰ段階の炉の北側の一部をこわして構築しており、70×60cmのはば円形の平面形を呈し、深さ15cmある。炉壁に接して埋設土器⑤、⑥の2個が斜めに埋設されている。炉の壁、底面の大部分が焼けており、特に埋設土器⑥が炉の壁に接する部分はかなり焼けて硬くなっている。



第Ⅲ段階一第Ⅱ段階の炉より
ひとまわり縮少し、60×60cmの
円形を呈している。炉に接して
埋設土器⑦が縦に埋設されてお
り、埋設土器⑧は炉の壁に接し
て斜めに埋設されている。埋設
土器⑦のまわりや、埋設土器⑧
の炉壁に接する部分はかなり焼
けている。



写真6 遺物出土状況



第13図 石製品

(年代決定資料と年代) 住居の構築年代の決定資料として埋設土器①～⑧がある。これらにより第55住居の構築年代は中期大木10式期と考えられる。

遺物包含層から出した土器 (第14～17図)

〔器形〕 口縁部が内反するもの、口縁部が外反し、頭部がしまって肩部が張り出すものがある。
〔口縁部〕 平縁や大波状口縁のものがある。〔底部〕 半底である。

〔文様〕 1本の隆線とこれをはさむ2本の沈線によって文様が構成されており、渦巻文がみられるものがある。(第16図-3～7.9.10. 第17図-9～12)、また、沈線によって区画された部分が、楕円形のくずれた文様などを形づくり、その間に末端が渦巻や丸く凹んだ沈線が施文されるものがある。(第14図、第15図2.3.)

〔時期〕 これらの土器については中期大木8b式、あるいは、大木9式とする説がある。

中期の包含層からは、土器以外にも種々の土製品、石製品が発見されている。

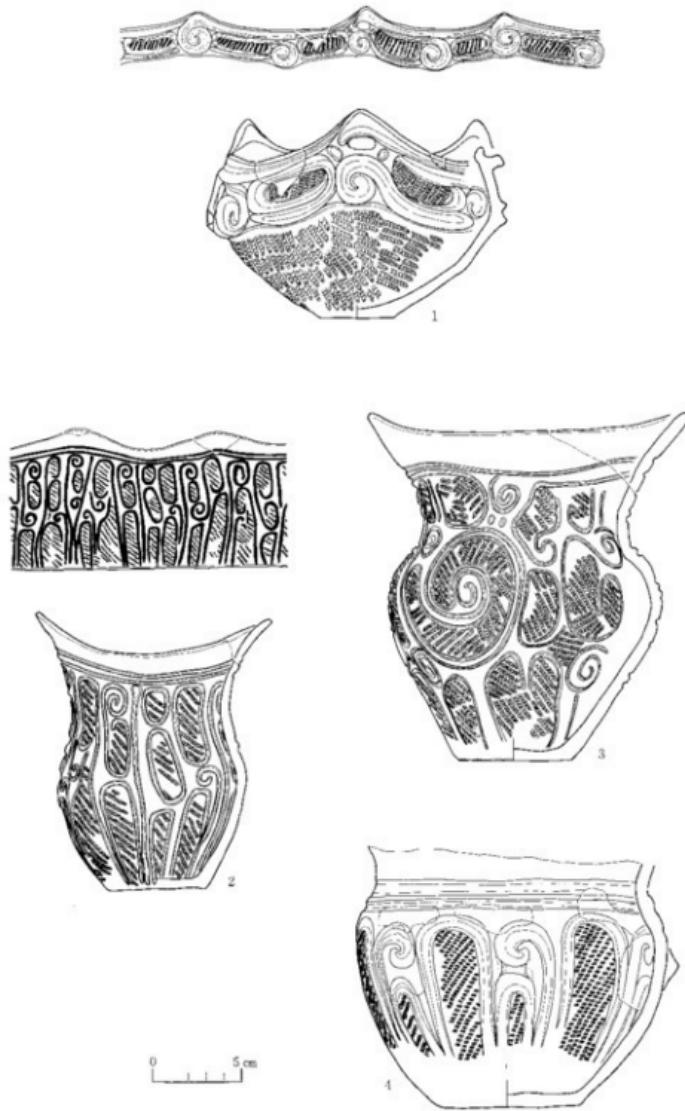
第13図-3 は、扁平な西洋梨形で、基部に横からの孔を穿っている。軽石製であることから、浮子に使用したと考えられるものである。第13図-1 は、石を加工して男性の性的特徴をシンボライズしたもので、当時の信仰に関連する、祭祀用具と考えられる。第13図-2 は、凹石と言われるもので、円碟の表・裏、両面に凹穴があり、用途は不明である。



第14図 繩文土器（中期）（展開図は側面図の1/2）



写真7 繩文土器（中期）



第15図 橋文土器（中期）（展開図は側面図の1/2）



BN-35-3型 (1、2、6、11、13)
BN-35-4型 (3、4、10、12)
BN-35-5型 (5、7~9)

0 10cm

第16図 繩文土器(前・中期)



BL-35-1層 (1、2、9~12)
 BL-35-2層 (4、5、8)
 BL-37-2層 (3、6、7)

第17図 縄文土器(前・中期)

古墳時代

水稻農耕を軸とする弥生時代には、生産経済の発展によって、食生活の変化とともに共同体の中に階級分化の基盤ができた。次の古墳時代になると、階級分化が成立して支配者階級が発生し、首長の墓制として高塚古墳が出現する。

このような政治的、文化的な社会の変化の中で、民衆の大部分を占め、実際に稻作に従事していた農民の生活は、ほぼ漸進的な推移であったと思われる。これら一般住民の生活の重要な一側面を示すものとして集落遺跡がある。

古墳時代前期

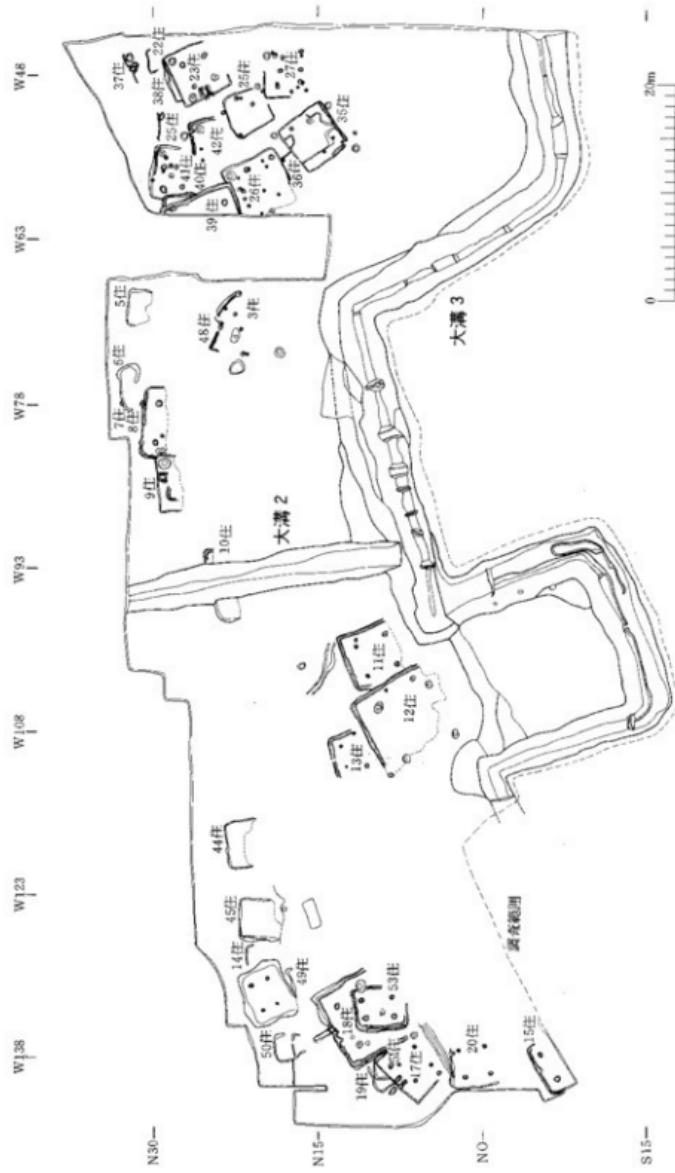
この時期の遺構としては竪穴住居跡、大規模な大溝などがある。住居跡の軒数は各時期を通して最も多い。遺物は多量の土師器の他に、土玉、木製品などがある。特に大溝より出土した木製品、竹製品は出土例が少いこともあり、貴重である。

〈竪穴住居跡〉

全面発掘した部分のはば全体より25軒検出されている。住居跡は全体の形を残しているものが多い。後世の耕作等により削平されたものと思われる。



写真8 D・E区（航空写真）

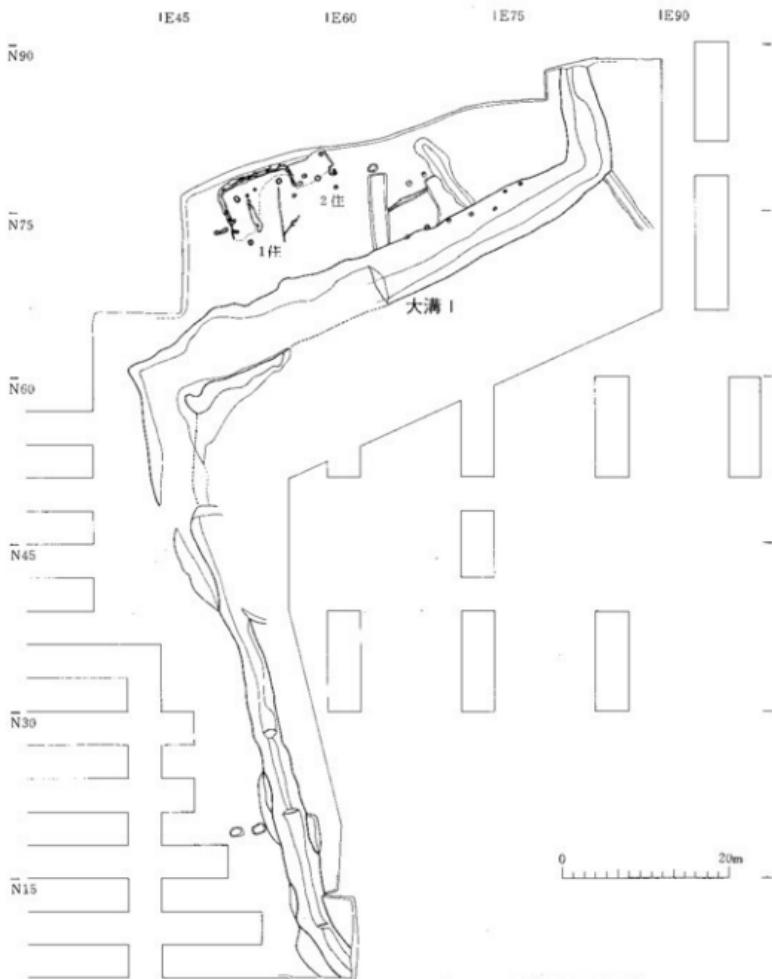


第18図 遊構配置図(D-E区)

形態と構造

平面形はほぼ正方形である。規模は1辺が3~5mのものと、8m前後のものとがある。住居内の施設としては、柱穴、炉、馬溝、などがあり、この時期にはまだカマドは発生していない。

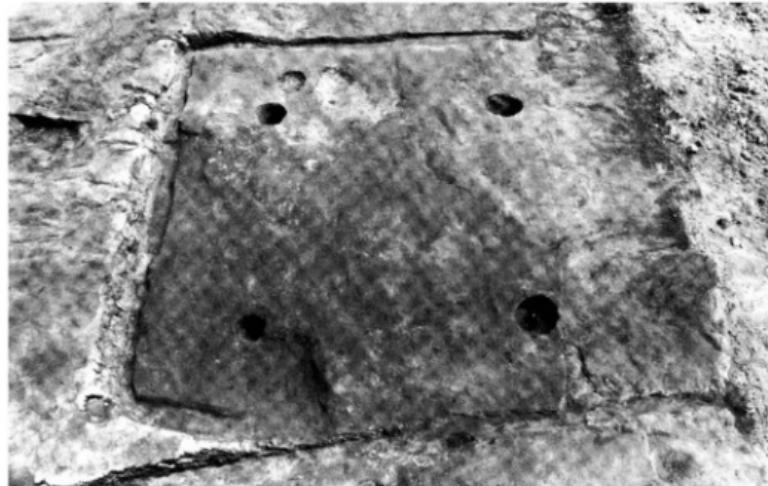
柱穴—床面に穴を掘りくぼめ、柱の下端を埋め込んでいる。このため柱穴には最初に掘った



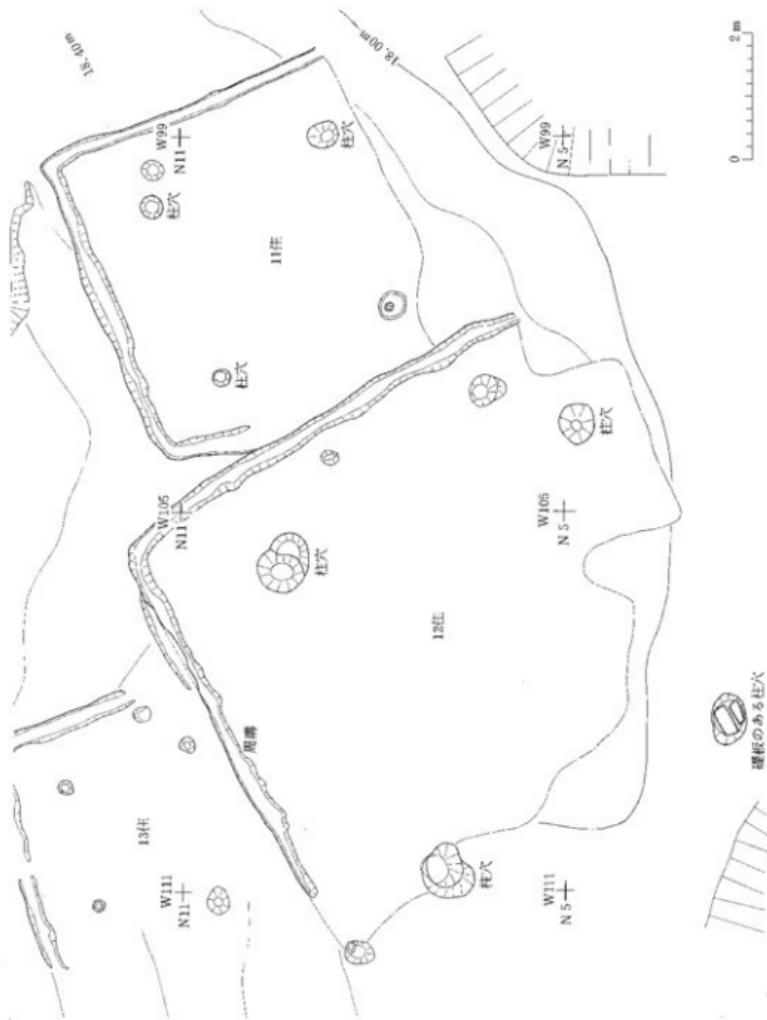
第19図 遺構配置図 (B図)

穴（掘り方）と、柱の跡（柱痕跡）とが二重に検出されることがある。多くは4個みられ、住居の隅を結ぶ対角線上に方形を成して位置している。第12住居跡の柱穴の1個には、底に板が2枚しいてあった。礎板と思われ、柱の沈下をふせぐのに用いたものと推定される。

炉—第26、30住居跡にある。床面の一部に焚き火をした痕程度の焼けた部分がみられるもの



上 写真9 第11住居跡 下 写真10 第12住居跡



第20図 第11、12、13住居跡

で、石組など施設の伴うものではない。焼け面の周囲にも焼土や灰などは特にみられない。

周溝—第11、12、13、15住居跡にみられる。壁に沿って住居内をめぐっている。周溝の性格については、壁のくずれを止めたり、住居内の排水といつたことが考えられているが、確かなことは不明である。

〈大溝〉

B区(大溝1)、E区(大溝2)、DからE区にかけて(大溝3)、3本の大溝が発見された。大溝2は第10住居跡と重複し、溝が住居跡を切っている。

大溝2と3は接しており、堆積土の状況より、大溝2は3と同時かそれより古い。

溝の断面は逆台形であるが、部分的には、「V」字あるいは、「U」字に近くなる。幅は3~6m、深さは1~4mである。

構造

溝内部の構造は単純でない。大溝1では段がついて深くなる部分、大溝3では段がついたり、溝に直交して細長く地山を掘り残した壠状の施設などがみられる。

平面形

溝の各部は直線的であり、それらがほぼ直交に近い形で接続している。大溝1の北端と大溝2は等高線と直交する方向にのび、斜面を切る形になっている。それ以外の部分は斜面のすそ近くを地形に沿うように続いている。

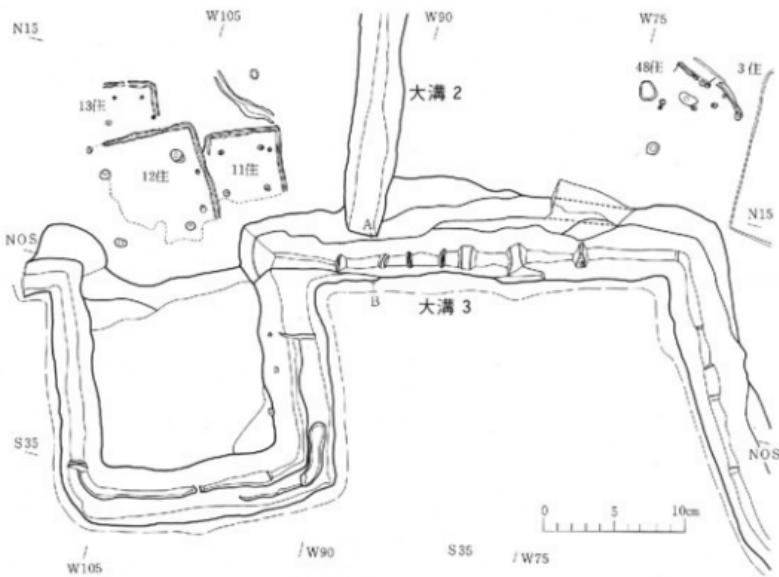
大溝3の西半は、「コ」の字形に折れ曲がり、水田面に向って張り出し部を形成している。張



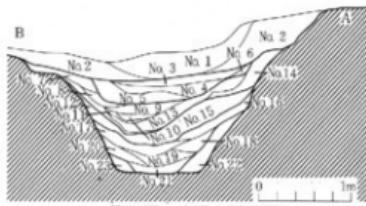
写真11 磁板のある柱穴



写真12 大溝3細部



第21図 大溝3細部



第22図 大溝3断面図

層位・層番	上	下	層厚	主要物・その他の
1 層 1 級	褐色オーブ岩 (D.YNG)	褐色オーブ岩 (D.YNG)	Medium Sand	Fine Pebble, Coarse Sand 分含む
2 級	*	*	*	*
3 層 1 級	オリーブ褐色 (D.YNG)	褐色 (D.YNG)	Fine Sand	微弱な塊状構造を含む
4 級	*	Silt	*	*
5 級	褐色 (D.YNG)	褐色 (D.YNG)	Fine Sand	Fine Pebble 分含む
6 層 1 級	褐色オーブ岩 (D.YNG)	褐色オーブ岩 (D.YNG)	Fine Sand	微弱な塊状構造を含む
7 級	*	*	*	*
8 級	褐色 (D.BGS)	褐色 (D.BGS)	Medium Sand	*
9 級	褐色オーブ岩 (D.YNG)	褐色 (D.YNG)	Fine Sand	*
10 級	*	Silt	*	*
11 級	褐色 (D.BGS)	褐色 (D.BGS)	Coarse Sand	Fine Pebble, Coarse Sand 分含む
12 級	*	*	*	*
13 級	褐色 (D.BGS)	褐色 (D.BGS)	Fine Sand	Fine Pebble, Coarse Sand 分含む
14 級	*	Silt	*	*
15 級	褐色 (D.BGS)	褐色 (D.BGS)	Medium Sand, Fine Pebble	Fine Pebble, Medium/Pebble 分含む
16 級	*	*	*	*
17 級	褐色 (D.BGS)	褐色 (D.BGS)	Fine Sand	Fine Pebble, Coarse Sand 分含む
18 級	褐色 (D.BGS)	褐色 (D.BGS)	Silt	±1-2mmのCoarse Sand 分含む
19 級	褐色 (D.YNG)	褐色 (D.YNG)	*	*
20 級	*	*	*	*
21 級	褐色 (D.BGS)	褐色 (D.BGS)	Medium Sand	Fine Pebble, Coarse Sand 分含む
22 級	*	*	*	*

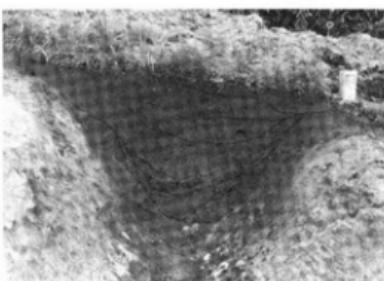


写真13 大溝2断面



写真14 上 大溝3 張り出し部 下 大溝1 南部

り出し内部は北側に段がついて、斜面を削り取ったような水平に近い平坦な面である。特に構築物はない。

延長部

大溝1は北端がしだいに浅くなり、農道にぶつかるが、農道北側の崖面を削ったところ、溝の輪郭は検出されなかったので、途中でなくなっている可能性が強い。南端は一本松古墳のまわりに沿ってさらに続くものと思われ、舌状台地の南端をめぐって大溝3に接続するが十分考えられる。

大溝2は北端が大溝1と同様に浅くなる。調査範囲外にも若干のびるものと思われるが、北に接する館跡によって破壊されている可能性がある。

大溝の性格

大溝は東と西に分かれて発見されている。その間は調査をしていないが、両方の溝が連続することは十分考えられる。溝の各部は直線的であり、それらが直角に近い形でつながり、全体を構成している。

大溝を全体的にみれば、遺跡の北辺を除く東、南、西の三方を区画するものといえる。また規模も大きく、さらに内部の構造にみられるように、堰状の施設や溝底面の段など溝内部に流入した水の流出を防げるようなものが多い。これらのことからみて、これだけの溝を構築する目的は、単なる地形の区画あるいは排水といったものではなく、防禦的な面にあったといえるのでなはいかと推定される。

集落との関係

大溝と同時期の住居跡が25軒ある。大溝が斜面下端近くを走っているのに対し、住居跡群は大溝より上位の斜面上に位置しており、大溝2の西方にまで広がっている。大溝2を大溝による区画の西端とすれば住居区域はその範囲内におさまることはない。しかしながら大溝3は大溝2よりも西にのびており、さらに大きな区画の範囲も考えられるので、西側の住居地域が必ずしも大溝の範囲から外れるものではないかも知れない。

集落の性格

集落の中で、こうした大規模な土木工事を必要とする大溝と、それによる区画はどのような役割りをはたしたのだろうか。

他遺跡の例をみると、同時期の住居跡が検出されている遺跡としては、藏王町大橋遺跡、名取市今熊野遺跡、同市西野田遺跡、同市宮下遺跡、瓦理町宮前遺跡などが知られている。けれども比較しうるような溝は発見されていない。大橋、今熊野遺跡では、調査範囲が遺跡全域に及ぶものではないが、宮前遺跡などでは丘陵上だけでなく、斜面の下端まで調査しているにもかかわらずこの種の溝は発見されていない。現段階では調査類例も少く、明確にすることはで

きないが、山前遺跡のような大溝はこの時期の集落に普遍的なものではないと考えられる。

もしそうだとすれば、本遺跡の場合、他と区別される特別な性格があったと思われる。たとえばこの地域の支配者が住んでいた、あるいは何か事がある時（祭りの時、戦いの時）などに周辺の集落の住民が利用する、といったことが考えられるのではないだろうか。

〈出土遺物〉

竪穴住居跡、大溝などから多量の遺物が出土している。土師器が大半を占め、他に人溝より出土した木製品、竹製品などがある。

土師器—完形あるいは一括品がかなり多い。器種には壺、甕、壺、高壺、器台、瓶などがみ

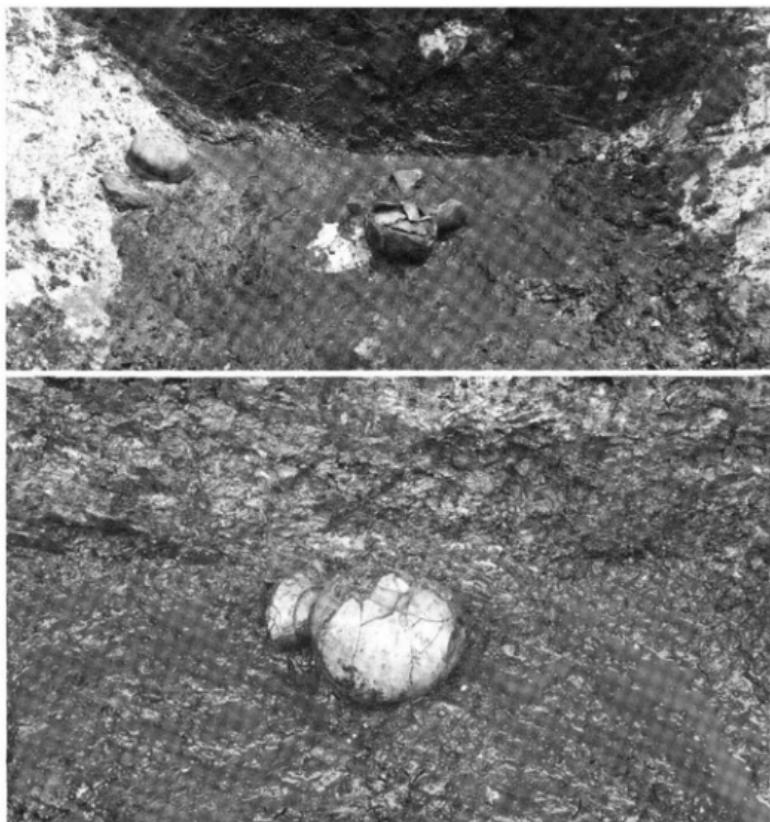
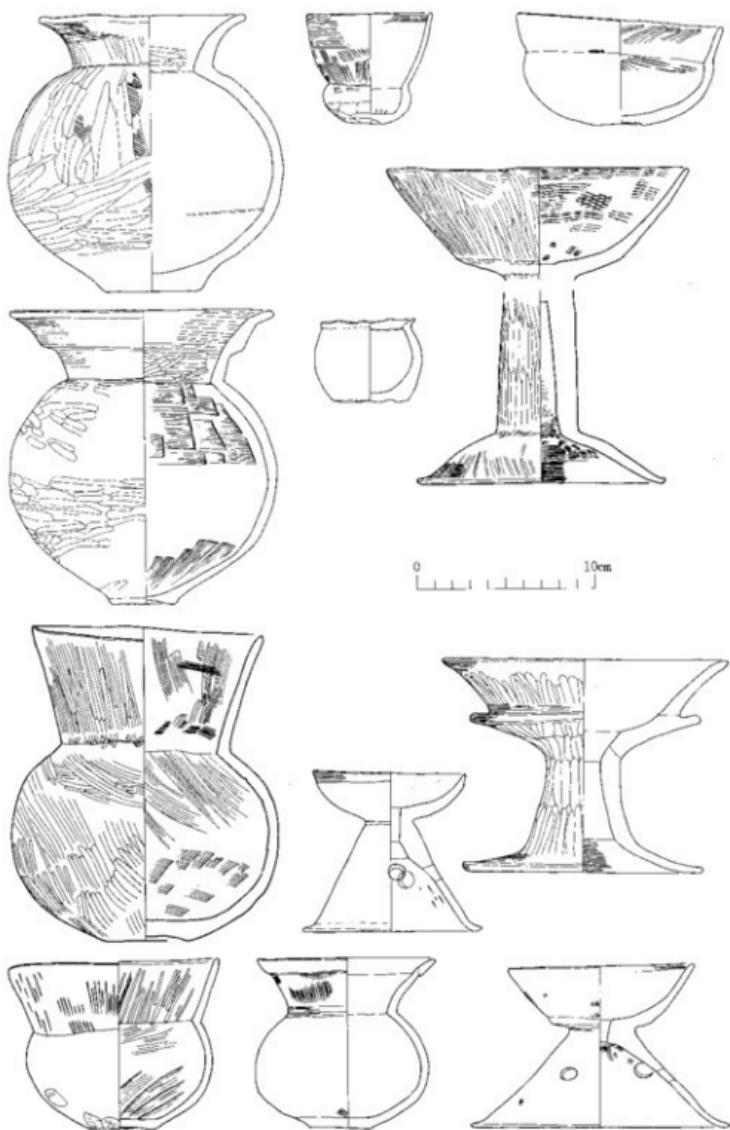


写真15 土師器出土状況



第23図 土器

られる。これらは器種の組み合わせに器台が入っていること、また個々の器種の特徴により、塙釜式（第1型式）に属するものと思われる。

木製品一すべて大溝から出土している。前述の土師器に伴出している。完形のものは少いが種類の推定できるものがいくつかある。鍛が最も多い4点、砧1点、突き棒のようなもの1点、箒などの未製品か砧かと思われるもの1点、柄穴の開いた把手状のもの1点、小さな穴のあいた漆塗りの把手状の破片1点などであり、他に加工痕のある木器あるいは建築部材とみられるものが数十点ある。

竹製品一大溝の木製品と共に出土した。笊、籠と思われるものが10点ほどある。ほとん

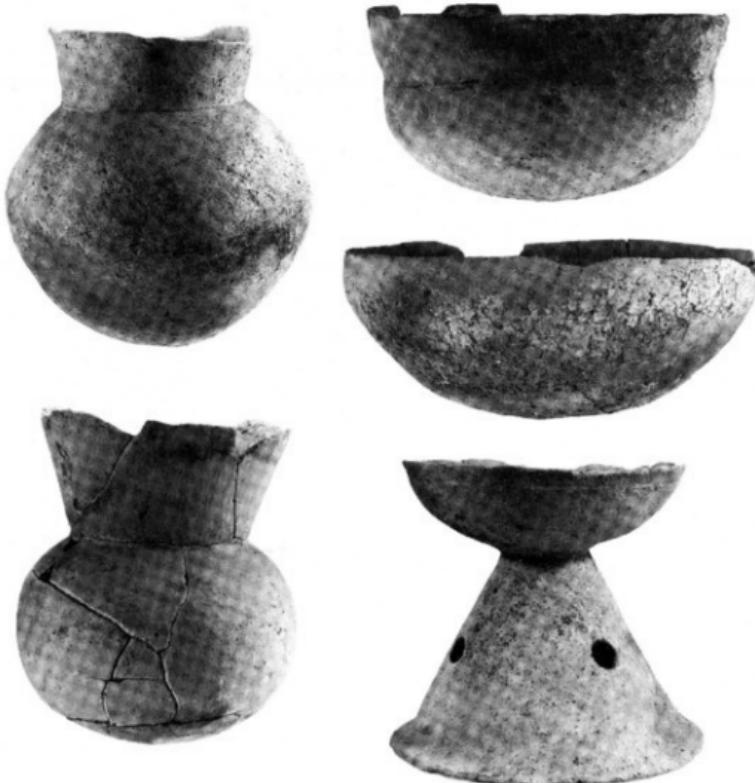


写真16 土師器

どは断片であるが、編み方のわかるものが数点ある。

この時代の木器は東北での出土例が少く、鋤のように直接農耕と関連する農具の具体例の発見、集落遺跡での漆塗り製品の存在など、重要な意味をもつ。

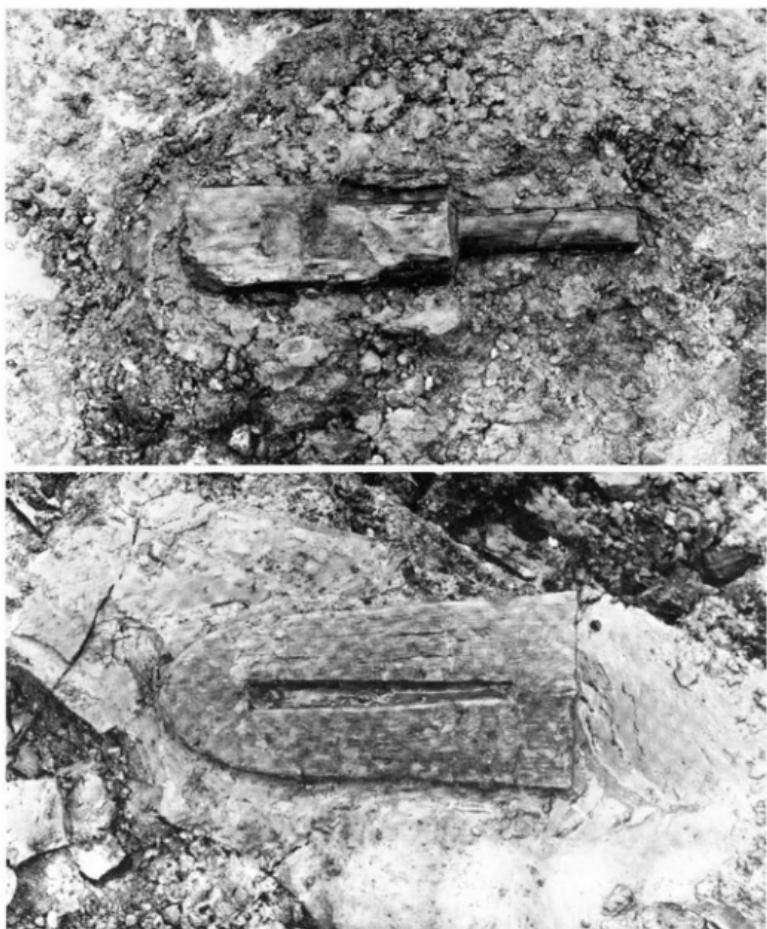


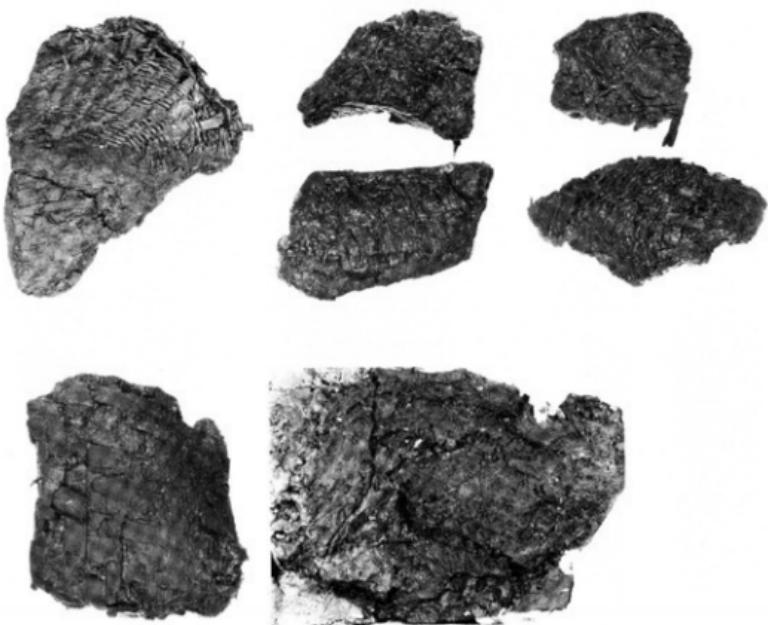
写真17 木製品出土状況



写真18 木製品



写真19 上 木製品 下 竹製品



古墳時代後期

この時期の遺跡としては、現在竪穴住居跡が1軒確認されている。遺物もこの住居跡から出土したものだけである。

〈竪穴住居跡〉

第23住居跡がこの時期に属する。第33住居跡と重複し、これを切っている。東および南の壁の大部分を欠くが、平面形はほぼ正方形で、1辺が4.8mである。西壁にカマドを備え、柱穴、貯蔵穴状のピットをもつ。

柱穴は4個あり、壁から約1mほど離れ、住居の隅を結ぶ対角線上にはほぼ正方形を成して位置している。そのうち1個には掘り方と柱痕跡の区別が確認されている。

カマドは西壁の中央部にあり、粘土を貼り付けて作られている。天井部はすぐになく、左右の側壁が残っている。燃焼部の底面から側壁の内側は熱を受けて赤変し、硬い。カマド内からは、土師器甕が一括して出土しており、その上に天井部のくずれたものらしい土が堆積していた。カマド奥より煙道の残存部が溝状に約20cmのびている。

貯蔵穴状ピットは2個あり、1個はカマドの右側に、もう1個は北東隅にある。カマド右側のピットには焼土、炭化物が多量に入っていた。北東隅のピットには土師器の甕、环の一括品

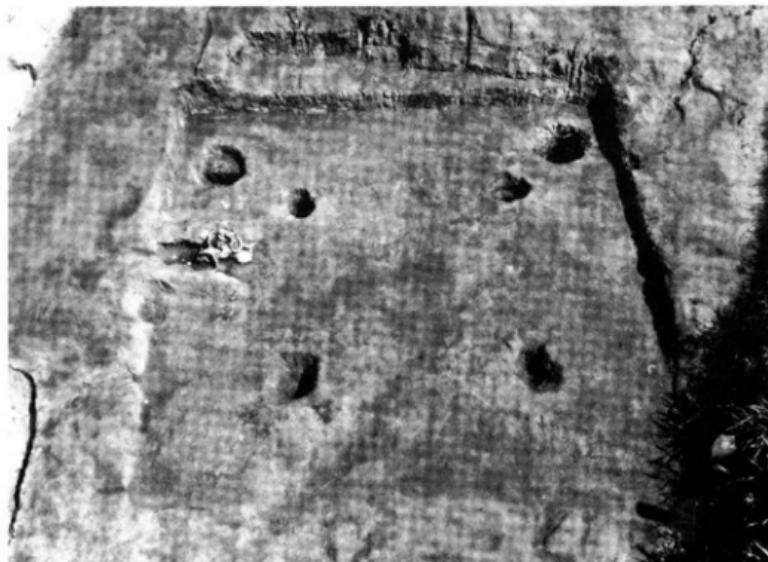
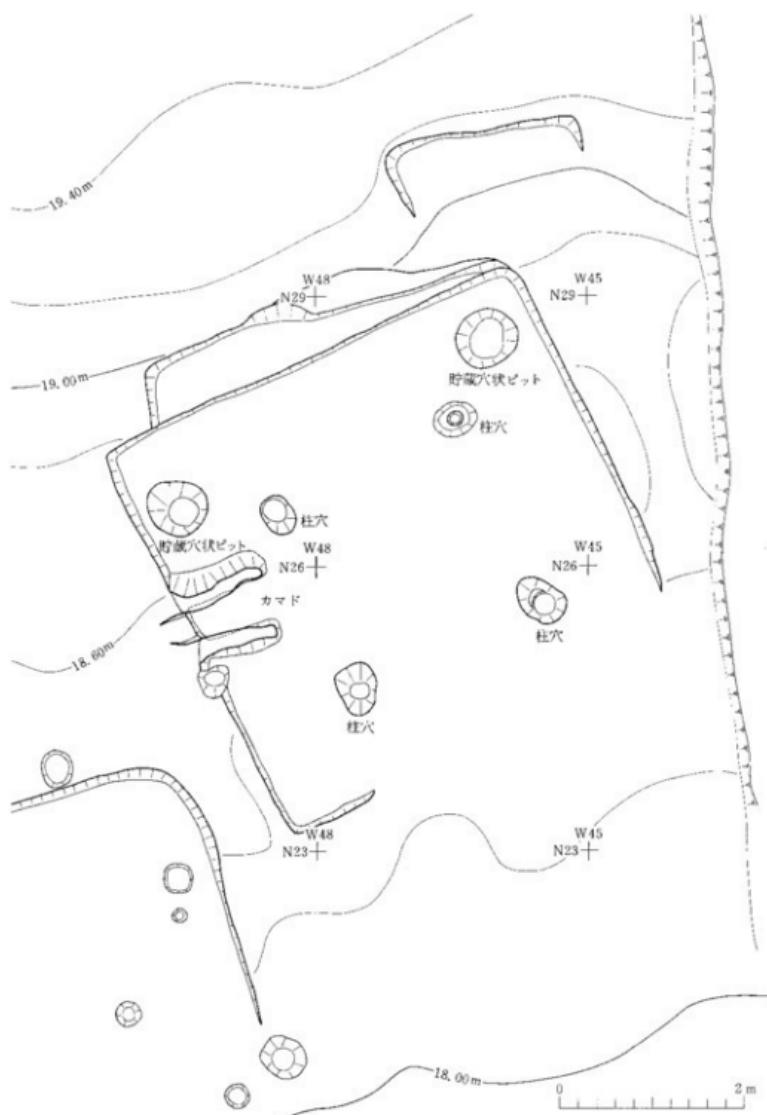


写真20 第23住居跡



第24図 第23住居跡

がみられた。この種のピットは必ずしも性格が明確にされていないが、これまでの類例では内部から完形土器等が出土する場合があるところから、何かを溜める、あるいは貯えるものだろうという推定をし、住居に伴った柱穴以外のピットで、形の整ったやや大形のものを貯蔵穴状ピットといっている。カマドを備えた住居の場合、県内ではカマドの右側につくことが多い。

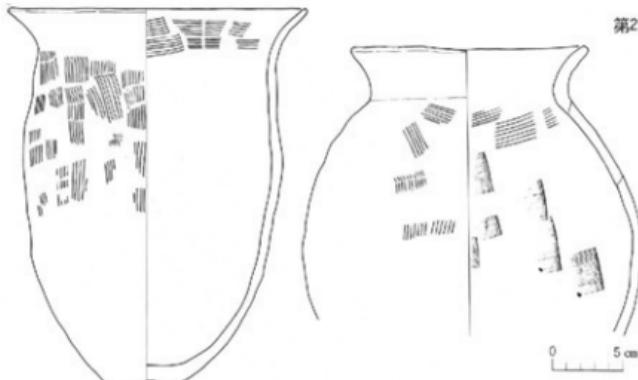
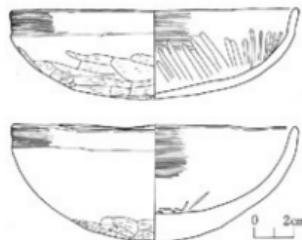
〈出土遺物〉

すべて土師器である。甕と壺がある。甕は口縁部が外反し、体部は球形のものと、長胴のものとがある。壺は口縁部が直立し、外側に稜のつくものもある。体部はやや丸味をもち、底部は丸底である。

これらの土師器は、長胴の甕があること、壺の口縁部の特徴などにより住社式（第Ⅳ型式）に類似するものではないかと思われる。ただし資料の整理が進んでいないので、所属時期については今後さらに検討する必要がある。



写真21 第23住跡カマド



第25図 第23住跡
出土遺物

奈良・平安時代

律令制度に基づいた政治体制の時代である。陸奥の国府が多賀城に設置され、国家の直接支配が一般民衆におよび、戸籍の作成、税（租・庸・調）の取り立てなどが行なわれた。これに伴って、集落内の整備なども考えられるが、その実態は集落遺跡の調査からはまだ解明されていない。

山前遺跡ではこの時代の遺構として竪穴住居跡が3軒発見されている。

〈竪穴住居跡〉

第1、18、28住居跡の3軒がこの時代に属する。第1住居跡はB区の北端で、第18住居跡はE区の西端で、第28住居跡はH区の東端で発見されており、第1住居跡と第28住居跡は近いが第18住居跡はかなり遠く離れている。

平面形はほぼ正方形で、1辺が約5～6.7mの規模をもつ。住居内にはカマド、柱穴、周溝、貯蔵穴状ピットなどがみられる。

柱穴は4個と思われ、住居の隅を結ぶ対角線上にはほぼ方形を成して位置している。掘り方と柱痕跡を確認できたものもある。

カマドは、第1住居跡では西壁、第18住居跡では北壁、第28住居跡では東壁にとり付けられ

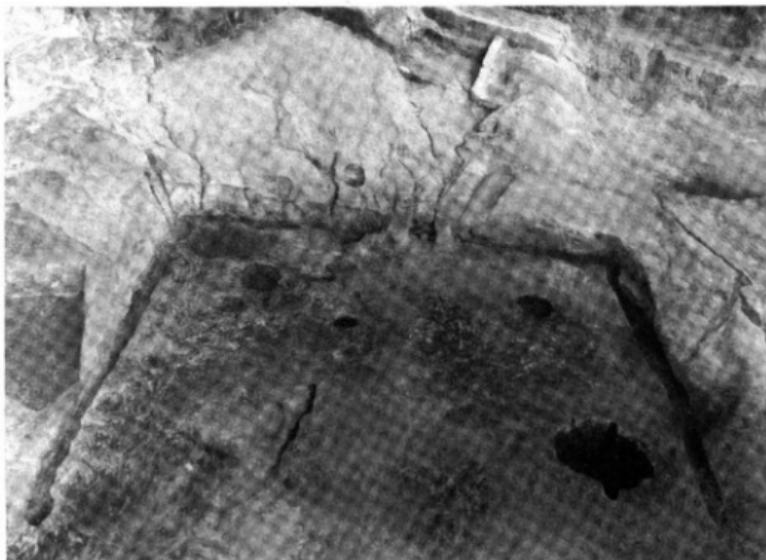


写真22 第18住居跡

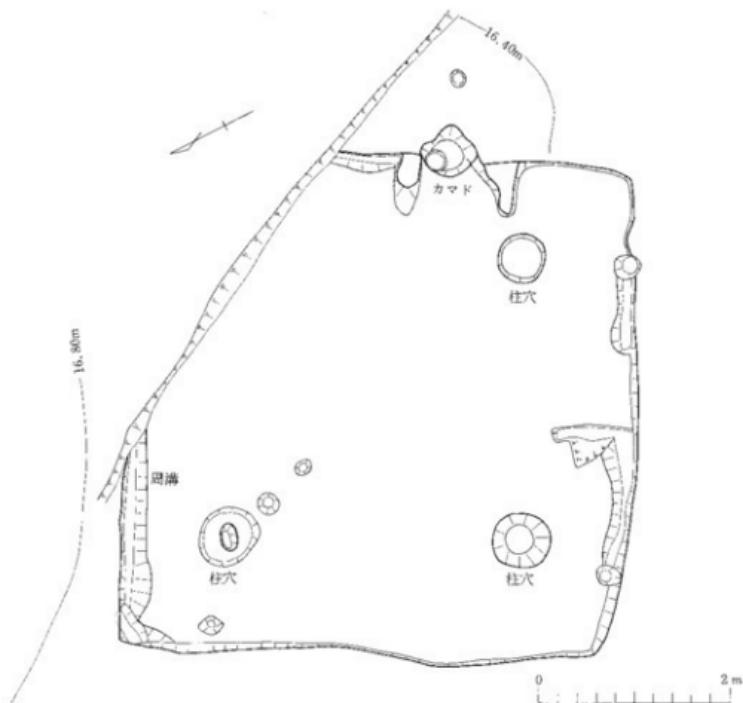
ており、第1・18住居跡の場合は斜面上方の壁にあるのに対し、第28住居跡では斜面下方の壁にみられる。いずれも粘土質の土を貼り付けてつくられており、天井部は崩れてしまい、側壁が残っている。内部は燃焼部を中心として熱を受けて赤変し硬い。カマドの奥壁から煙道がのびている。最終的にカマドを取り除いたところ、下から周溝と接続する溝が検出され、須恵器の大甕、土師器の甕の一括品が入っていた。つまり、竪穴を掘り込んでから、先に周溝をめぐらせ、その一部に土器を埋めて、その上にカマドを構築している。

周溝は住居内を壁に沿ってめぐっている。貯蔵穴状ピットは第18住居跡にみられる。

このように、一般民衆の住居であったと考えられている竪穴住居跡は、古墳時代後期のもの



第26図 第18住居跡



第27図 第28住居跡

と形態、構造の上で大きな変化はない。。

〈出土遺物〉

土師器と須恵器が主なものである。量的には土師器が大半を占める。他に第28住居跡から鍾と思われる鉄製品が出土している。

土師器一甕、环、鉢などがみられる。甕は口縁部が外反し、体部は球形と長胴とがある。环は体部から口縁部にかけて外反あるいは外傾し、外面にかすかな段のつくものがある。底部は丸底である。内面黒色処理されている。鉢は口縁部がほぼ直立し、体部は丸味があり、底部は平底である。内面黒色処理されている。

これらの土師器については、奈良・平安時代のものと思われるが、所属型式については、さらに検討を要する。

須恵器一大甕、环、高台付环などがある。大甕は口縁部が外反し、体部は上半が球形に近く、

下半は底部にむかってなだらかにすぼまる。底部はやや尖がった丸底である。环は体部から口縁部にかけて外傾している。底部は平底で、ヘラ切り痕が残り調整のないものと、回転ヘラケズリされて切り離しの不明なものとがある。高台付环は体部から口縁部にかけてやや外反気味に立ち上がる。ヘラ切りで环部を切り離し、底部の周辺のみ回転ヘラケズリした後に外傾する高台をついている。高台付环には口縁部と体部の境近くに相対して2つの把手がつけられているものもある。

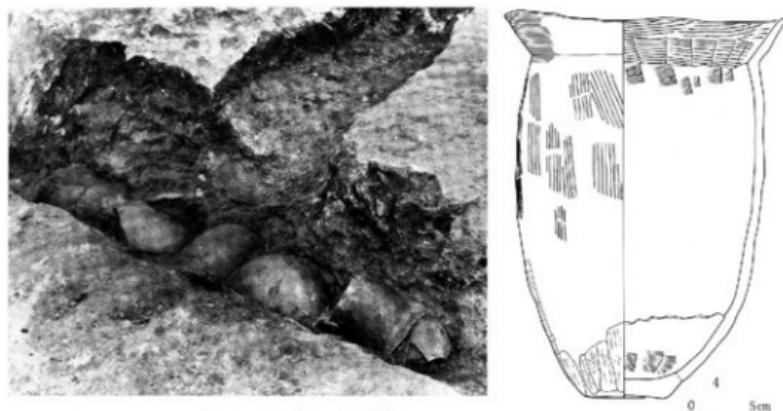
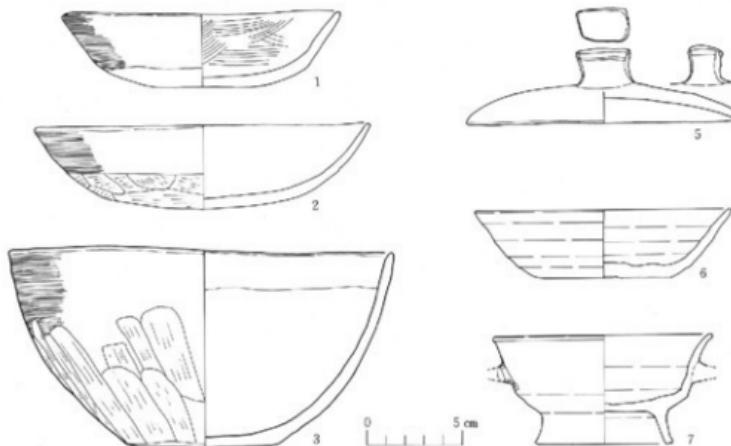


写真23 遺物出土状況（第18住居跡）



第28図 第18住居跡出土遺物（1～5 土師器、6、7 須恵器）

中世

源頼朝の奥州征伐により、1189年以降その勢力が東北に及び、東北各地に関東武士が所領をあたえられ、治めるようになる。しかし、1333年鎌倉幕府は亡び、南北朝時代となり東北各地の武士にも中央の対立が波及する。その後、応仁の乱がおこり、群雄割拠の時代を迎える。

武士が当地方を鎌倉時代以降支配していたことは、今までに発見された文書、城館などの遺跡、板碑等より知ることができる。

今回の調査区の北東部から十数枚集中して板碑が発見された。いずれも表土下の層より横になった状態で出土している。原位置を保っているかどうか、不明である。同じ層中より繩文土器、土師器、陶器なども出土している。年号の明らかな板碑はいずれも14世紀のものであり、南北朝時代のものは、いずれも北朝年号を使用している。延文碑、貞治三年二月碑、嘉暦碑の

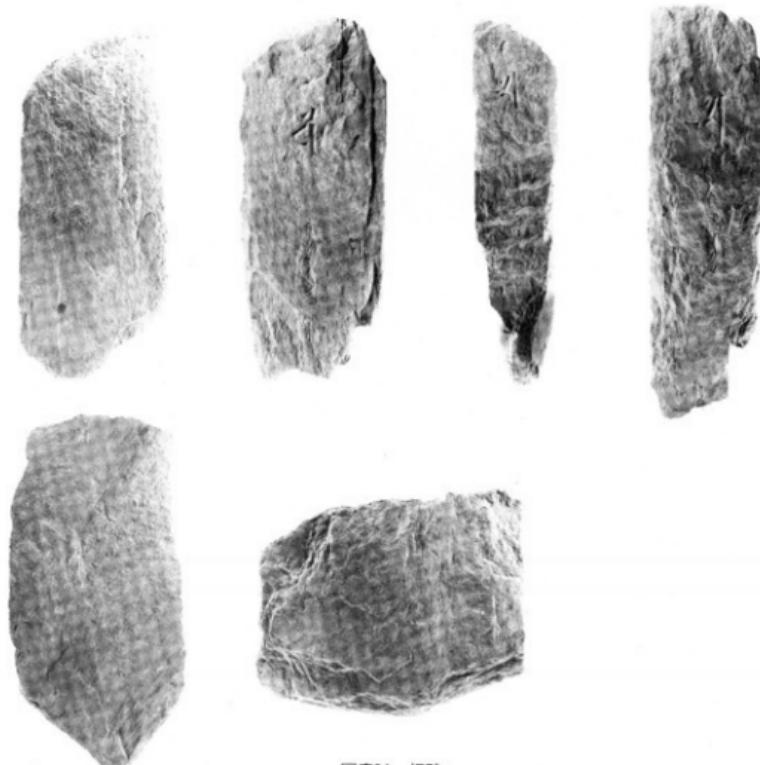
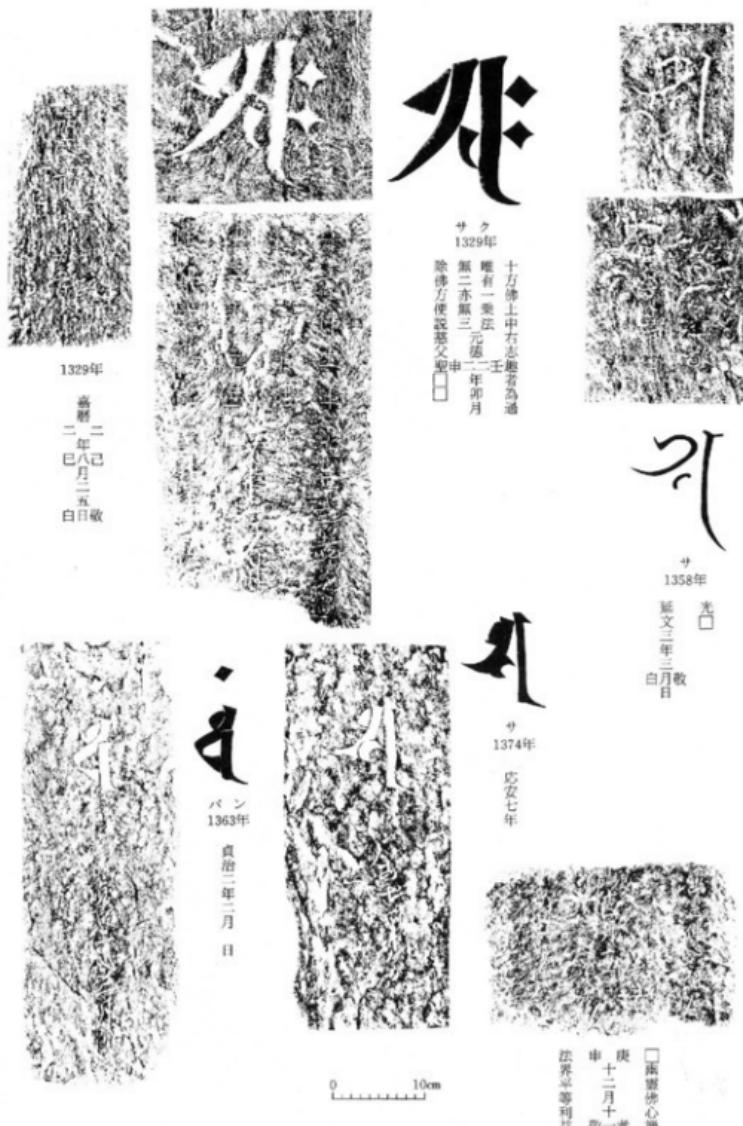


写真24 板碑



第29回 板碑

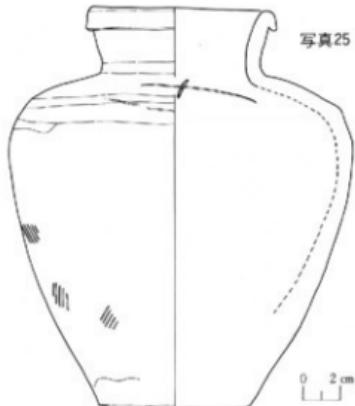
字の部分に金泥のみられるものもある。板碑は種々の供養のためにたてられたもので、素材として稻井石、粘板岩(?)が多く使用されており、死者の忌日にあたっての追善塔婆がおもある。種子としては大日如来(パン)、觀音菩薩(サ)、勢至菩薩(サク)がみられる。

板碑群の間から首の欠損した古瀬戸壺、皿が3個体分出土し、壺は14世紀中頃、皿は13世紀末と思われる※。地区は異なるが、常滑製と思われる押印のある大壺の破片も出土している。

※ 名古屋大学教授橋崎彰一氏のご教示による。



写真25 古瀬戸壺・皿



第30図 骨壺(大館出土)

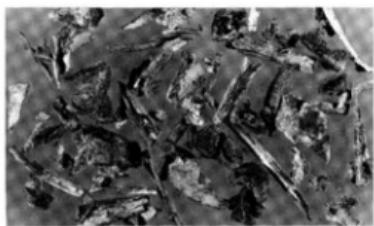


写真26 骨壺内の人骨



写真27 骨壺(大館出土)

山前遺跡壁穴住居跡集成表

体形番号	平面形	規 模	重複・焼成率	カ フ ピ		壁 壁	窓 梁	柱 穴	縫 間	貯 穴	下 フ ット	時 代
				ア	フ							
1	方 形	6.3m × ?	2往を切っている	カマド	西 壁	0.9m × 0.6m	粘土構築	1.1m × 0.3m	4 個	な し	あ り	奈良・平安時代
2	方 形	3.6m × ?	1往に切られている	火 焼	北壁より	0.3m × 0.2m	粘土構築	不 明	不 明	な し	—	古墳時代(備塗)
3	方 形	不 明	4往と重複、新旧不明	不 明	—	—	—	不 明	不 明	—	—	古墳時代(備塗)
4	方 形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	古墳時代(備塗)
5	方 形	3.0m × ?	な し	不 明	—	—	—	—	—	な し	な し	古墳時代(備塗)?
6	(土壤)	欠 番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7	(土壤)	欠 番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	方 形	6.2m × ?	9往に切られている	不 明	—	—	—	—	—	—	—	—
9	方 形	5.0m × ?	8往を切っている	カマド	北壁より	0.4m × 1.0m	粘土構築	—	—	な し	—	部分的にあり 古墳時代(備塗)
10	方 形	6.4m × ?	人縄2に切られている	不 明	—	—	—	—	—	不 明	不 司	北東隅 な し
11	方 形	4.8m × ?	12往と重複、新旧不明	不 明	—	—	—	—	—	—	—	—
12	方 形	不 明	1往と重複	不 明	—	—	—	—	—	4 個	な し	あ り
13	方 形	不 明	12往と重複	不 明	—	—	—	—	—	4 個	な し	あ り
14	方 形	不 明	4往と重複、新旧不明	不 明	—	—	—	—	—	2 個	な し	あ り
15	方 形	4.5m × ?	な し	不 明	—	—	—	—	—	—	—	—
16	方 形	—	—	—	—	—	—	—	—	2個底面	不 明	あ り
17	方 形	5.2m × ?	17往を切り、18往に切 されている	カマド	北壁中央	0.5m × 1.0m	粘土構築	1.1m × 0.3m	4 個	不 刺	な し	奈良・平安
18	方 形	6.7m × ?	17、18往を切っている	カマド	北壁中央より	0.4m × 0.5m	粘土構築	1.0m × 0.3m	3個底面	不 刺	あ り	奈良・平安

付箋 番 号	平面形	規 模	重複・増改築	ガ ラ フ ア ン ド お よ び 規 則		柱 位 置 置 置	柱 規 則	燃 道 (流路)	主 柱 穴	階 微 状 態 部 フ ト	周 溝	備 考
				柱 位 置 置 置	柱 規 則							
19	方 形	不 明	31柱とは割り離れている 18,19柱には割り離れている	不明	不明				不明	不明	な し	古墳時代(築造)
20	方 形	不 明	なし	不明	不明				4 個	な し	な し	古墳時代(築造)
21	方 形	4,7m×?	40,41柱と重複 6,7柱と重複 位序不明	位序不明	位序不明				2 個	北 東 面	な し	古墳時代(築造)
22	方 形	2,1m×?	38,23柱と重複 新旧不明	不明	西壁中央	0,4m×0,9m 粘土構築			な し	一層(切妻)	な し	古墳時代(住跡)
23	正方形	4,8m×4,7m	38柱を切る	カマド					4 個	北 東 面	な し	古墳時代(住跡)
24	万 形?	不 明	不明	不明	不明				不明	不明	不 明	古墳時代?
25	四角形	3,6m×3,8m	不 明	不明	不明				不明	不明	な し	古墳時代(築造)?
26	正方形	6,3m×?	46柱を切る	6?	北壁中央近く				4 個	北 東 面	な し	古墳時代(築造)
27	方 形	不 明	なし	不明	不明				4 個	北 東 面	な し	古墳時代(築造)
28	正方形	5,0m×?	55柱と重複, 55より新しい。	カマド	東壁中央より 0,9m×0,5m 粘土構築				3 個	南 西 面	な し	奈良・平安
29	方 形	5,8m×?	46柱と重複 46柱に切り離されている	不明	不明				2 個	南 西 面	な し	古墳時代(築造)?
30	方 形	3,3m×?	52a, b, c柱と重複 新しい。	不明	不明				な し	な し	あ り	古墳時代(築造)
31	方 形	不 明	32柱に割り離れている	不明	不明				1 個	南 西 面	な し	古墳時代(築造)
32	方 形	4,0m×?	33,34柱と重複 35~47	カマド	北壁中央 0,5m×?	粘土構築	1,40×0,1m	2 個	な し	な し	あり	古墳時代・平安
33	方 形	4,7m×?	34,35柱と重複 36~47	カマド	北壁車より 0,5m×0,5m 粘土構築				1 個	南 西 面	な し	古墳時代・平安
34	方 形	4,2m×?	33柱に割り離れている 35柱とは位序不明	不明	不明				構造、形態	な し	な し	古墳for
35	正方形	4,8m×4,4m	36柱を切っている	不明	不明				不明	不明	一層あり	“ ”
36	方 形	不 明	35柱に割り離れている	不明	不明				不明	不明	な し	“ ”
37	方 形	不 明	不明	不明	不明	0,3m×0,8m 粘土構築			不明	北 東 面	な し	古墳時代・平安

件番 類 別 号	規 格	構 造	電 線 管	地 盤	主 柱 高	鉛 錆 穴 状 態 (腐 蝕)	周 辺 備 考	古 墳 時代 (鶴釜)	
								改 革 事 項	電 線 管 規 格
38 方形	平面形 6.4m × ?	電線・増設管	不 明	23mに切られている	不明	不明	不明	なし	古墳or奈良・平安 占墳時代(鶴釜)
39 方形	平面形 6.4m × ?	電線・増設管	不明	40、26柱を切っている	不明	1個漏認	不明	あり	古墳時代(鶴釜)
40 方形	平面形 3.9m × ?	電線・増設管	不明	39、26柱を切られている	不明	不明	不明	あり	古墳時代 鶴文時(鶴木10)
41 だ円形	不 明	電線の可能性あり	炳	中央部	不明	複式軸	不明	不明	古墳時代(鶴釜)
42 方形	不 明	電線の可能性あり	カマド	北壁より 0.4m	0.4m × 0.4m	粘土構造	なし	不明	あり 奈良・平安
43 矩 形	不 明	電線	不 明	中央西より 0.2m	0.2m × 0.2m	地床板	なし	なし	古墳時代(鶴釜)
44 万 形	4.1m × ?	な し	不 明	中央西より 0.2m	0.2m × 0.2m	地床板	なし	なし	古墳時代(鶴釜)
45 万 形	3.2m × ?	な し	炳	中央西より 0.2m	0.2m × 0.2m	地床板	なし	なし	古墳時代(鶴釜)
46 万 形	4.9m × ?	29柱を切っている	不明	39の地盤区分からも見 出されない	不明	2個漏認	不明	なし	古墳時代(鶴釜)?
47 万 形	不 明	炳	炳	32柱の地盤区分からも見 出されない	不明	不明	不明	なし	古墳時代 鶴文時(鶴釜)
48 万 形	不 明	炳 前田不明	炳	3正柱後 17柱は新直(不明)	不明	不明	不明	なし	古墳時代(鶴釜)
49 長 方形	4.5m × ?	1柱と重複してあるかも 知れない	炳	19、18柱に切られている bの中央	不明	4 個	なし	なし	古墳時代(鶴釜)
50 万 形	2.2m × ?	な し	炳	19、18柱に切られている bの中央	不明	不 明	不明	なし	古墳時代(鶴釜)
51 万 形	不 明	炳 17柱は新直(不明)	炳	17柱は新直(不明)	不明	不 明	不明	なし	古墳時代(鶴釜)
52 円 形	不 明	a、b、cの3解あり	炳	中央西より 0.4m	1.1m × 0.6m	複式軸	不明	あり	古墳時代(鶴木9) 鶴文時(鶴木10)
53 方 形	3.4m × 4.4m	18柱と重複。炳	炳	中央西より 0.4m	0.9m × 0.5m	地床板	4 個	不 明	古墳時代(鶴釜)
54 だ 円 形	不 明	9柱と重複。炳	炳	中央西より 0.4m	0.6m × 0.6m	複式軸	不明	あり	古墳時代 鶴文時(鶴木10)
55 円 形	不 明	28柱と重複。炳	炳	中 央 尖	0.6m × 0.6m	複式軸	不明	あり	古墳時代 鶴文時(鶴木10)
56 万 形	不 明	55柱と重複。新しい	カマド	北 壁	0.6m × 0.5m	粘土構造	不明	あり	古墳時代 鶴文時(鶴木10)
57 方 形	3.9m ×	33、34と重複 前方不明	カマド	北壁中央	0.4m × 0.5m	粘土構造	なし	不明	古墳時代 鶴文時(鶴木10)

V.まとめ

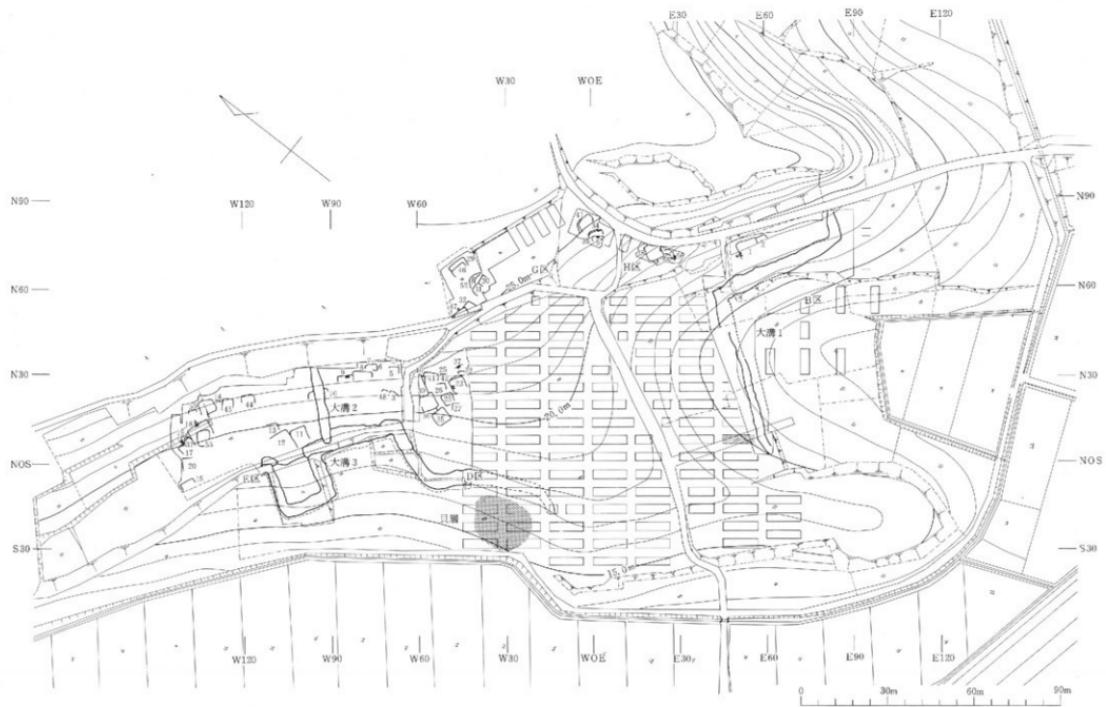
山前遺跡の今回の調査では次のような成果が得られた。

1. 繩文時代早期、前期、中期、古墳時代前期、後期、奈良、平安時代、中世にわたって各時代の遺構、遺物が数多く発見された。
2. 繩文時代では貝塚、遺物包含層、竪穴住居跡などが発見されている。貝塚は約500m²の広がりを示す。今回は精査していない。遺物包含層は約10,000m²あり、大部分は中期の層が広がっていると思われるが、一部精査した東斜面では、中期の層の下に早期の層がみられた。これらは層位的な発掘によって、遺物の時期的な変化を知ることができた。住居跡は3軒あり、中期に属するものである。
3. 古墳時代から奈良・平安時代の遺構として、大溝3本、住居跡49軒などが発見されている。このうち住居跡については出土遺物の整理が進んでいないため、所属時期の不明なものがある。
4. 古墳時代では、前期の大溝3本、竪穴住居跡25軒、後期の竪穴住居跡1軒が確認されている。
5. 奈良、平安時代では、竪穴住居跡が3軒確認されている。
6. 中世では、板碑が十数枚集中して出土した。年号の記されているものはいずれも14世紀代で、南北朝時代のものが多い。

このように、本遺跡では長い時代にわたっての遺構、遺物が発見されており、当地方における各時代の生活の様子を示す資料が得られた。

特に古墳時代前期の大溝は、規模の大きさ、構造、平面形態から防禦的性格を有するものと思われるものであり、また出土遺物として多数の土師器とともに、鎌、砧などの木製品がある。これらは東北地方ではこれまでの例をみないので、大溝の存在は集落の構成に重要な一例を加えるものであり、木製品、竹製品は、木工、竹細工、農具などについての貴重な具体的な資料を与えてくれた。

また、調査対象区の中央部約12,000m²は、団地造成計画より除外して現状のまま保存することになった。これは近年開発の波におし流されて遺跡の破壊が多いなかでよろこばしいことである。保存範囲については適当な環境整備を行ない、今回の調査によって得られた資料とともに各時代の様子、さらに埋蔵文化財に対する理解を一般の人々に深めてもらうための材料として、いかに活用するかが今後の課題であろう。



第31図 山前道路構造配置図

山 前 遺 跡

昭和51年3月15日印刷

昭和51年3月30日発行

発行 小牛田町教育委員会
〒970-0001
仙台市立町24-24 電話022-86466
